家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の教育

⑩

昭和四十八年十月一日発行（毎月一回一日発行）昭和二十三年四月十五日第三種郵便物認可 日本国有鉄道特別扱承認雑誌第六八二号 幼児の教育 第七十二巻 第十号

お茶の水女子大学 図書館 48.9.20 受贈

第七十二巻　第十号　日本幼稚園協会

ーより豊かな幼児教育をー

## 幼児の造形　〈紙〉

藤田復生著

幼児のための紙の造形教材集です。紙は、いろいろな変化によって新しい形を創りだします。この本は、基本から展開まで、美しい写真と図解でわかりやすく解説しています。Ａ５判 224頁 1,000円 〒140円

## 幼児の造形指導（改訂版）

井手則雄著

この指導書は指導のやり方というより、助言のための本です。主体はあくまで、保育者の創意の中にあります。保育者はこの本を参考にそれぞれ独自のカリキュラムを組んで、子どもの表現の成長をのばしてほしいと著者は願っています。

Ｂ６判 150頁 350円 〒80円

## 幼児の体育あそび（マット・ボール編）

三宅照子著

マットとボールを使っての、さまざまの体育あそびを現場向きに絵や写真を使って解説しました。

Ｂ５判 120頁 650円 〒110円

## 新しい幼児体育 おはなし体操

石井文子著

幼児の動きから生まれた新しい幼児体育の本です。すばらしいお話とそれに密着した軽快なリズムにのって、楽しく遊びながら、しらずしらずのうちに幼児の体力づくりができるようにくふうされています。

Ａ４判 108頁 650円 〒110円

発行　フレーベル館

●お求めは弊社代理店、支店・支社・出張所へどうぞ。

# 幼児の教育

第七十二巻　第十号

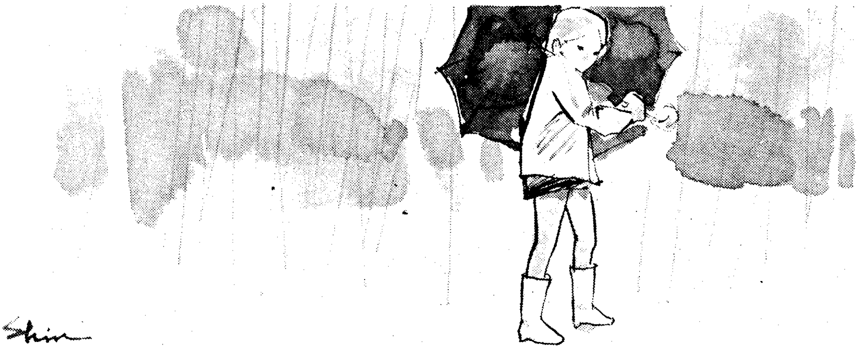
# 幼児の教育 目次

—第七十二巻 十月号—

表紙 赤坂三好
カット 斎藤信也

©日本幼稚園協会
1973

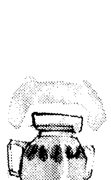
附属病院と附属幼稚園……勝部真長…(4)
詩集—失われた季節を求めて—より……周郷　博…(6)
幼保一元化をこえて(一)……守屋光雄…(7)
倉橋賞受賞論文—幼児の文字指導—……三神廣子…(11)
子どもと保育者—積木遊びの観察記録から—……河野としゑ…(15)
読書のすすめ……加奥愛子…(22)
子どものおひさま……津守房江…(23)




読書のすすめ……………………………………………………清水美智子…(31)
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　斉藤幸彦…(32)
思い出すままに……………………………………………………石島褏二…(33)
聖ボニファチアス幼稚園での一年……………………………真野輝彦…(38)
私の幼児教育論……………………………………………………喜田史郎…(42)
秋の遠足……………………………………………………………川崎千束…(46)
読書のすすめ………………………………………………………降矢震…(48)
私の保育……………………………………………………………小林ちう…(50)
幼児教育の源流(Ⅷ)
　ロバート・オウエンの幼児教育思想(その二)………………山根祥雄…(55)
一学期をふりかえって……………………………………………今井由美子…(67)
読書のすすめ………………………………………………………松隈玲子…(70)

# 附属病院と附属幼稚園

勝部　真長



私は以前に狭心症の発作を起こして、三度入院したが、二度は私立病院、一度は大学の附属病院であった。私立病院は患者の治療に一生懸命である。治療に失敗して患者を殺してばかりいると、病院の評判がガタ落ちして入院患者が減るのを恐れるからである。私立病院は医師も看護婦も入院患者に対してお客さん扱いをしてくれる。

　ところが大学の附属病院、とくに国公立の附属病院はやや趣きがちがってくるようである。第一、大学の附属というものは、患者の治療と並んでそこの医学生を教育し、また教授たちが研究し実験する場として、附属病院を使っているのだからである。

　いいかえれば大学の附属病院では患者の治療だけを目的にしていない。それよりも新しい病気、珍しい病気を発見し、研究し、実験し、論文にまとめ、発表し、学術上の研究成果をあげることを大きな目的にしている。だから附属病院で歓迎される病人は、鼻カゼひいたりはやり目などありふれた病人ではない。ちょっと首をかしげるような難病奇病の患者ほど大事にされるのである。そこで患者は研究材料にされる。私も心臓の二十四時間の動きを電気で記録するテレメーターという機械にかかって、一晩中、計測器を手足や胸につけて横になっていたことがあった。三人の医師が寝ずの番で替る替る記録をとってくれた。私は私のために調べてくれるのだと思って大いに感謝した。しかし後で気がついたことは、そのテレメーターの調査は、三人の医師が学位をとるための共同研究の資料にするためであって、そのことで私の病気が直接によくなるというわけのものではなかった。私はモルモットの代用だったのである。

心電図をとる時、ときどき医学部の学生が実習にきて、私の分もとったりするが、下手くそで私は笑い出したくなる。いつもの看護婦の方がよっぽど要領がよくて正確なのだ。

研究に熱心なのは学者として結構なことに違いないが、その学術上の野心のために患者を研究の手段としてのみ扱い、患者の病気を全快させることを忘れてしまう医学者が現われたりするのは困る。よくわからないが北海道医大で起こったW教授の心臓移植の実験とか、東大の精神科で問題にされたU教授の人体実験問題など、どうも研究熱心のあまり勇み足がつい出てしまうのであろうか。

医学は人間の健康を対象とするのであるから、狭い部分や小領域についての専門研究だけでなく全体としての生命観・身心観がなくては、病気はなおせないだろうと思う。専門家というものは時に視野が狭く、専門バカが多い。専門バカは、片足で立っているようなもので、不安定なのである。学問が細分化されればされるほど、専門家と自称する学者先生については警戒を要する。

幼稚園教育についても附属病院と同様の危険があるように思う。子どもを教育することが第一義の道であるはずなのに、教育よりも自分の「研究」、「実験」、「観察」を優先させて、子どもたちを「手段」として、「モルモット」として扱うような傾向が、研究者が自分の研究成果をまとめることをあせるあまりに、つい勇み足をしてしまう心配が、大学の附属学校には起こりかねないのである。

たしかに大学の附属学校は、研究の場であり、実験の場であり、教育実習の学生たちの実習の場である。そのことを抜きにして附属というものの存在理由はない。しかし何も知らずに入って来た子どもたちにとっては、それは迷惑な話である。子どもたちはただ成長したい、生活したい、伸びたい、遊びたい、学びたい、というので通っているのに、うるさく附きまとって「観察」されたり、「実験」されたりしているのは、かわいそうな気がする。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

# 一瞬の夕映えの中に

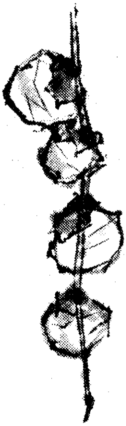
周郷　博

空高く
翔び去って行く
金色にかがやく
渡り鳥を見た
公害に傷(きずつ)いた
大地の
雨雲の去った
初秋の夕べだった

一瞬の夕映えは
消えて
琥珀(こはく)と黄金の色は
たちまち
紫と薄鉛色に変って
もう　空の鳥も
黒い点のように
ちぢんだが
ぼくは
ぼくは迫ってくる闇の中で
大地の心を
知ったように思った

周郷博詩集―失われた季節を求めて―より（国土社発行）

# 幼保一元化をこえて(一)



守屋光雄

## はじめに

「編集部」より、「幼保一元化の問題」というテーマで執筆するよう依頼されたが、私は、このテーマに関連した研究や論説を、一九七〇年以来、毎年、日本保育学会大会で研究発表しつづけ、全国私立保育園研究大会において、三回にわたり、講演、提案、助言を行ない、兵庫女子短期大学論文集に、三回にわたり投稿し、「保育問題研究」(第四十号)「保育の手帖」(第十六巻、第十号および第十一号)、「保育ノート」(第二十巻、第八号)「保育の友」(第十九巻　第四号) 保育カリキュラム (第二十二巻　第十号) その他の保育関係専門誌に執筆し、テレビ、ラジオ、新聞の取材に応じ、かつまた、拙著「保育の原点」および「明日への保育」(新読書社) として総括、刊行されているので、詳細は、これらの文献によって、理解していただくことにして、ここでは、なるべく重複をさけて、幼保一元化の理念と実践についていくつかの問題提起を行ない、読者の検討の資料を提供したい。

## 幼保一元化をこえて

幼保の一元化とは、現体制内における幼稚園の保育園化、保育園の幼稚園化でもない。既存の幼稚園や保育園を解体し、止揚して、新しい、乳幼児の集団保育機関を創造することを目標にする。したがって、私は、幼保一元化を超克する立場をとる。

私の主宰する「北須磨保育センター」は、現行法規により、「北須磨幼稚園」と「北須磨保育園」としての認可を受けているが、実態は、幼稚園でも保育園でもない。二歳から就学までの幼児の集団主義保育機関である。その意味で、既に現行法を破るものである。「法を守るべきである。したがって、法を破る者を強く憎む、しかし、法を破らしめる者を更に強く憎む」と末川博氏はいっているが、私も、子ども、保育者、親を差別する幼保の二元制を認めるわけには、いかない。子どもの学習権(発達保障)、保育者の研究権、親の労働権を三立させるために、

幼保は一元化に止まることでなく、一元化をこえるところに志向さるべきである。北須磨保育センターは、まさに、そのことを指向して前進しつつあるのだ。

## 北須磨保育センターにおける幼保の超克

(1) 同一敷地内に、棟つづきに、現行法による認可幼稚園と保育園があるが、園舎はもとより、運動場、遊具、および諸設備すべて、幼保の差別なく使用されている。

(2) 〝幼稚園(児)〟〝保育園(児)〟という既存の概念を棄却するため、幼稚園(児)、保育園(児)という言葉(概念)を使用せず、保育時間の長短から、短時間(児)、長時間(児)、という表現を用いる。

(3) 幼稚園教諭、保育所保母という差別的言辞を用いず、すべて、教師(先生)と呼び労働条件(給与、労働時間、諸権利など)も平等である。

(4) 「保育」を「教育」の対立概念としてとらえるべきではない。「保育」と「教育」とは一体であり、乳幼児の(集団)教育、即保育であり、保育所も幼稚園も乳幼児の集団(主義)教育の機関であるべきである。

(5) 子どもの発達保障

発達観―子どもを歴史的社会的存在としてとらえ、発達を規定する要因として、歴史的社会的環境を、発達の原理として、成熟より学習を重視、発達理論として、弁証法的唯物論の立場をとる。レーニン、ノボグロッキー、ヴィゴッキーたちによると、人格形成のメカニズムは、同時に心理機能の発達ということであり、それは、外界の客観的現実をより正確に、より多面的に、反映、認知することであり、その仕方は人間の内的状況、欲求に依存し、認知することは同時に行動を可能にし、行動することによって新しく認知しうる。認知すれば内的状況は変化し、変化すれば新しい世界が認識される。このように、内外界の矛盾と対立を統一する。それ自身による弁証法的発展こそが、人格形成の過程にほかならず、この内、外の矛盾の調和統一をつかさどる神経系の活動の客観的体験が心理現象そのものであり、神経系の最高中枢機関である大脳皮質の内・外界の矛盾対立の統一機能が自我の本質であり、人間は、この自我を中核として、心身ともに環境との交互作用のなかに、人格を形成していくのである。

発達における従来の「適応」の概念を否定、社会変革と子どもや、教師の変革を重視する。子どもの内的矛盾のあらわれとしては、拒否、反抗、懐疑などが考えられる。早期からの系統的教育計画による疎外のない集団主義教育の必要性を強調する。

このような子どもの発達の可能性の保障を常に、基本に考え

ることが必要である。

(6) 保育者の研修権

子どもの全面発達を保障するには、教育条件が問題となり、すぐれた保育者が必要になる。従来の幼稚園や保育園の保育者養成や資格には、前述のような差別があり、かつ保育者(特に保育所)の研修権は保障されてない。乳幼児の教育は、児童、青年、成人の教育より、また、保育所は幼稚園より、幼稚園は小学校より、小学校は中学校より、中学校は高等学校より、高等学校は大学より、大学は大学院より……低級な教師によって、低級な教育が行なわれるという既存の誤った考えを打破するために、"保育者に研修権を"ということを合言葉に、保育センターでは、この権利保障に、思い切った措置をしてきた。

たとえば、

短時間保育には、クラス担任があるが、午後(長時間)保育では、当番制にしている。給食、(〇~一時)—午睡(一~三時)—おやつ(三~四時)をそれぞれ別な職員が当番する。当番以外の保育者は、研修にあたる。四時に第一群が帰宅、四~五時までは助手が保育にあたる。四~五時は全員がそろって研修や打会せなどができる。五時以後の保育は行なわない。

職員研究会を毎週(月) 一—三時、四~行なう。当日のみ、午睡中は助手がみる。研究会は、保育内容、事例研究、教育相談、学会研究会報告など。研究会の議長、記録は毎月交替当番制。

必要な研究(修)会への出張旅費は、全額支給。全員出張の時は休園とする。

従来、保育所は、日曜、祝祭日以外の休園が認められなかったが、保育者の研修権を守るため、夏期、冬期、春期などに一斉に一定期間休園することもあり、また、いわゆる夏期、冬期、春期休暇中は、長時間保育児は自由登園とし、保育者も交替出勤することにしている。

(7) 働く母親の労働権—婦人解放—

子どもをもって働く母親の労働権が守られるために、早朝から薄暮にわたる長時間保育の要求が切実な問題となっているが、ほんとうの意味で、働く母親の権利が守られるためには、前述の子どもの発達と保育者の労働権(とりわけ研修権)が保障されることが不可欠かつ必要な条件となる。

長時間保育が、同じく女性労働者である保育者の労働条件を悪化させたり、子どもの心身の発達を阻害するようなことがあれば、かつての女工哀史にみられたように、婦人は、いつまでも、低賃金、重労働、仲間や子どもを犠牲にし、労働がしいられるのみで、女性の解放も、労働権も守られない。

したがって、保育センターでは、センターで働く保育者の労

働権（研修権）を守ることによって、子どもの発達を保障し、働く母親たちは、長時間保育を不必要とする体制をめざして、労働時間の短縮と有給休暇の増加の要求運動を積極的にすすめることを要望するし、保育者の担当児童数をへらすなど保育条件の改革に努力している。

(8) 給食について

敗戦後、占領軍による救済政策として発足した〝給食〟制度を、集団（主義）保育における健康教育として再認識するため、いまだにつづけられている脱脂粉乳の拒否にはじまり、給食費（現行保育所における）の増額を自治体や政府に訴えると共に、親との協議により児童の健康を保障するため、実費を徴収している。

長時間、短時間の差別なく全員に完全給食支給、遠足、誕生会などの日は、全員、親の手づくりによる弁当持参。

(9) 〝母の会〟について

母の会（しろはと母の会）は、長時間、短時間部全園児の母親によって組織され、園の財政上の後援団体でなく、会計も園と独立し、自主運営される。行事について財政的補助をすることはなく、母親の研修費（毎月講演会、研修会を行なう）に大半を使用し、教材園の奉仕活動などが組織的、計画的に行なわれている。

(10) 行事

子どもを見せ物にするような行事は行なわず、子ども中心の保育に力を入れる。

いわゆる〝お遊戯会〟や〝母親参観〟などは行なわない。遠足も保護者の付添なしで、苺狩り、芋掘り、栗拾い、動物園、水族館などに行く。七夕にはプラネタリウム見学、夏には常設プールでの水遊び、キャンプファイヤー、花火大会、宿泊保育、黒ん坊大会、秋には、体力遊び中心の親子ぐるみの体育祭、廃品活用の造型展、冬にはマラソン大会など、いずれも、全園児、差別なく、子ども中心に行なう。

(11) その他、保育方針、保育計画（カリキュラム）、保育内容、教材教具、すべての施設も、長、短の差別なく活用されている。

なお、保育方針、計画、内容などについては、次号でやや詳しく述べることにするが、いずれも、中央教育審議会答申には反対で、現行の「幼稚園教育要領」や、「保育所保育指針」には批判的で、これらの「要領」や「指針」や、保育の六領域などに拘泥することなく、教師集団の創造的な発想を重視している。

保育センターの理念と実践内容をもとに、創造的カリキュラムをくみ、創造的な保育を果敢に行ないつつ、きびしい自己および相互批判のもとに、研究をつづけている。　　―つづく―

（北須磨保育センター・兵庫女子短大）

◇倉橋賞受賞論文◇

# 幼児の文字指導

三神廣子

## 保育界の現状

現在ほど幼児の文字指導について、その考え方や実践が動揺している時代はないであろう。

六歳児が入学する時、小学校側は、「文字は名前が読み書きできて、数については、十まで数えられればよろしい」という。しかし、実際入学したばかりの子どもについての小学校側での指導の速度は早く、親は「うらぎられた」と思い、子どもはついていくことができず、つまずいてしまい、あげくは登校拒否になりかねない。それではかわいそうだと幼稚園側はなんとか子どもに教えこもうとする。幼稚園自体が教えないでいると、教えている幼稚園を探して、遠いところへでも通わせたり、親が一生懸命教えたりするといった例がかなり見受けられるのが現状であり、小学校側の「名前が書けて……」といったことはから念仏に等しいようである。

私の手もとに今集まったばかりの文字指導についての資料があるので簡単に紹介しよう。これは北海道、東北、関東、中部から、九州、沖縄にいたる百十二の幼稚園について調べた結果である。こまかい点については、他の機会にゆずり、大まかな点のみについてみていくと次のようである。「幼稚園では文字指導をどのようにしているか」について、約60％の幼稚園が「特別にはしていない」、「ワーク・ブックも使用していない」、「一斉に指導もしない」、「親は過半数が指導してほしいようだ」、「幼稚園で指導しないので、親が教えるため、子どもはよく知っている」、「入園のときは文字とシールを一緒にはって知らせる」、「絵本は保育室にならべてあって、自由に見られるようになっている」、「五歳児の後半から教える」、等の方向を示している。一方、残りの約40％の幼稚園での指導法はかなりの違いがある。「ワーク・ブックの使用」、「一斉の文字指導」、「線のおけいこ」、「各自で練習帳に個別指導」、「先生が丸印をつけて宿題

を出す」、「日案の中にきちんと組み、三十分で二文字、その文字も書きにくい文字と書きやすい文字を組み合わせる、二週間に六文字教える」、「文字を家庭で教えると書き方が誤っていることが多いので、園で二学期を目標にして年間計画の中へ入れて指導」、「四歳児は文字の切り紙を与える、五歳児では音節の指導、図形の異同、手首の運動、標識や記号の認識、五十音の指導」、「硬筆書字を保育の中に入れ、―やわらかく、すなおにといった点に注意して練習しなさい―」、等しっかりした教育理念をもって行なわれている園といわゆる園児募集の一法として行なわれているところ等いろいろであるが、大都市周辺の幼稚園が圧倒的に多い。こうした傾向が徐々に地方へも広まっていくことは十分に考えられる。

## 詰め込みは逆効果

オースベルものべているように、未成熟時の学習は、教育的に不健康であり、早すぎる言語化は思考を硬化させ、探索の範囲を限定する。こうした指導を受けると、幼児の興味意欲をそぐ結果になる。しかしまた、すでに成熟し、興味も十分にあるのに、読むことを延ばすことは、獲得されるべき能力を逃がしてしまうことになるであろう。そこで、幼児が読書への適合状態に達しているか否かを確かめなければならない。つまりレディネス（準備性）段階にあるかどうかを測定し、そのプロフィールをみて効果的な指導の方策をたてることが大切である。

ここで、いわゆる文字指導を受けた幼稚園児と受けない幼稚園児について、どのような影響が子どもにあらわれるかを簡単にのべてみよう。この両群にレディネス・テストを実施すると、三歳児、四歳児は「指導を受けた群」が高くなるが、五歳児になると、逆転して、「受けない群」の方が高くなる。これは要求もなく、準備もできていないのに、一斉に指導されると、みんな教えてもらえるという態度が身につき、考えたり、記憶したり、すすんで覚えようとする自主性が育たなくなってしまうのではないかと考えられる。さらにこのことは小学校へ入ってからの成績、特に国語の成績との関係をみることにより、はっきりとする。幼稚園で一斉に文字指導を受けた群と受けない群について、小学校一、二、三年生について追跡調査をしてみると、次のような結果が出された。

国語テストは一般によく使用されている、「教研式、診断的学力検査、小学H形式国語」を使用し、(1)きく、(2)よむ、(3)つくる、(4)かく、の四項目について調べてみると、二年生の「かく」を除いて他はすべて幼稚園で文字指導を受けなかった子どもの学力の方が高くなっている。さらに知能偏差値の同一の子どもとの比較を行なってみても同じように、幼稚園で文字指導をさ

れなかった子どもの方がよい成績を示している。こうした結果からみると、むやみに早くから文字のみを指導したところで、それは一時的な気やすめであり、かえって悪いことには、将来の学力は伸びなやみ、思考力が硬化するということになる。

## 幼児期の文字指導

それでは何もしないのが一番よいのではないかということになる。前にのべた全国調査で、特に指導といえば（一斉に文字指導をしていない幼稚園）、「絵本を自由にみるように」、「文字とシールをはる」、「五歳児後半から文字を教える」程度でよいのかということである。

子どもの成長過程で、話しことばから書きことばへ進むことによって、その精神生活の内容は飛躍的に豊かになるはずである。直接経験しうる世界から、文字を媒介として間接に経験しうる世界にすすんで、子どもは多くの思想に接触し、あらゆる知識を得、たえざる成長の源をそこからくみとることができるようになる。しかし、「しろ、しろ、いこう、のはらへいこう」、というようなことでも、それを読んで理解することはきわめて複雑な過程なのである。話しことばとしてこれを正しく使用する子どもも、文字をみて声を出して読み、その意味を理解しうるためには、子どもの発達過程中、多くの機能が成熟し準備されなければならない。

そこで、日常幼児の指導をされる方々に、指導内容のひとつとしての手がかりをのべてみたいと思う。

一、ひとの言うことを傾聴し、理解し、その指示に従って正しく反応する力を養うあそびをする。たとえば、「お当番さん」の役割をはたしたり、絵本をみて、なにがあるか、あてっこをして遊ぶ。こんなことから、しだいに絵をみて、いわれたところに○印や×印を指示されたように記す。徐々に複雑な遊びに入っていく。

二、日常経験している事物の中から、共通の機能を引き出し、それを統合する力を養うあそびをする。たとえば、なぞなぞ遊び、（くだものってなあに。電気でうごくものなあに）類似あそび等をする。

三、話をして聞かせ、それを理解し、一定のあいだ記憶する力を養うあそびをする。幼児期から、ひとの話を聞くことは、そのお話にそって考え、感じる能力を養っていく。お話をただ聞くのみではなく、子どもの心の中にイメージをつくり意味づけをするものである。これは長期にわたり養われる能力である。はじめは簡単な文章からはじめていったらよいであろう。たとえば、「花子さんがいます」。「花子さんがお人形をもっています」。「花子さんがお人形をもってあそびにいきま

した」、のように簡単な事がらは論理的に正しく順序づけることができ、しばらくは心にとどめて、必要なときには順序にしたがって再生できることが望ましい。

四、文字はいろいろな形をしている。またよく似ているものが多い。そのために、細部の異同を弁別し、記憶する力を養うことが大切である。はじめは三つのうちで二つ合っているものをえらばせるものから、一つのサンプルと同じものを探しだすあそびをする。順次複雑にしていく。

五、絵と文字を結びつける。これは絵に合ったことばを読みとり、その意味を理解することが必要である。たとえば、文字では「うま」を読むことができても、「うま」そのものを知らなければ、こうしたことはできないのである。知識のみではなく、実際のものを知ることが大切である。

六、事物の因果関係を理解し、順序よくならべて、一つのまとまりのあるものを構成する力を養うあそびをする。たとえば、あさがおの「たね」、「つる」、「花」の三つの絵を順番にならべさせるような遊びをする。

以上、六つの要素を文字指導の準備のためにとりあげた。これらは三歳、四歳、五歳児にその発達に応じた教材を考えて、子どもに出合いの場をつくっていくことが文字指導へつながっていく道と考えるのである。

（一宮女子短大）

**参考文献**

Ausubel, D. P : Theory and problems of child development. 1958.
大西誠一郎：「読書レディネス・テスト手引」金子書房S46
三神廣子：「読書レディネス・テスト作成の試み」日本教育心理学会土田論文集S44
三神廣子：「読書レディネス・テスト作成の試み」一宮女子短期大学紀要第九集S45
三神廣子：「読書レディネス・テストについて―幼稚園で文字を教えた場合と教えない場合―」日本保育学会第25回論文集S47
三神廣子：「これからの保育内容―文字指導を中心にして」日本保育学会第26回論文集S48

# 子どもと保育者
## —積木あそびの観察記録から—

河野としゑ

子どもが遊んでいるとき、別の玩具を持ち出して見せると、いままで遊んでいたものを放り出してむらがり寄ってくる。新奇なものを求めてとびついてくる。どうしてすぐその遊びを捨てて、大人の示すものにとびついてくるか？　ということは不思議なことであるけれども、興味が出てくればあきもしないで単純なつまらぬことのくり返しの試行が続くのも、幼児の行動の特徴である。

積木あそびにみられた子どもたちの遊びもまたそれであった。並べた積木の上へ上ったりおりたり、あるいはとびおりる、またよじのぼるということがくる日もくる日も続くのである。

乳児、年少幼児の積木あそびの観察研究から発達の過程を明らかにしようと思うのだが、(発達のためにこの積木が、子どもたちにどのように扱われたか。積木で遊んでいる子どものあるがままに放っておくだけで発達していくものなのか。他のどのような条件がかかわって新しい行動が生じていったか)積木あそびの観察といえば、運動的情意的行為が眼前にみられるから、研究の手順の上では比較的楽に材料がえられるともいえるが、五ヵ月のしん君をはじめ一歳二歳の小さい幼児の遊びは、周囲の被影響性も強いし、子どもの行為をよしとするか非とするか、介助するかしないか、教育観、指導観とも大きくからみ合い、そう単純なことでもなかった。

観察している事柄、事態をまず言語に書きかえねばならぬこと、保育のあり方をいわゆる授業型から自由型に切りかえたこと と、積木の数を子どもの活動に十分なだけ準備すること、これらの問題を問題にする必要があった。

## 観察記録のまとめ

### (1) 積木と最初の出あい
#### ——認知中心の反応期——

五ヵ月だったしん君には八ヵ月になったころから積木を対象とする行動が見え出した。同じ保育室の子どもたちは、しん君より大きかったので少し早くから親しみをもち、積木選択の積極的な行動が現われ出していた。

八ヵ月から一歳二ヵ月の子どもの記録をまとめると表1のようになる。

積木を受容的に扱っているが、積木に触れて満足している表情をみると、対象物との関係で満足していると思われる。ただ一個の積木を相手としている。一対一の関係づけである。一個を自分に対置させて、(タッチする)、(なでる)という状態は、触感覚的に認知しているのだ。床にごろりと寝ていて片手で触れ、すわっていて手を積木の上におく。ひざをつきながら押し、もたれかかって押すことのはじめは押すより動いたといった方がよい。(たたく)ということも現われる。衝動的にたたくことから反応を楽しんでいるたたき方に発展する。たまたま触れているだけの積木を片づけようとすると拒否したのである。

**表 1. 積木と最初の出あい**

認知中心の反応期８カ月～１歳２カ月

| 区　分 | 行　動 | 発生順 |
|---|---|---|
| 受容する | ・さわる　触れる | 1 |
| | ・床にすわってたたく | 2 |
| 分化する | ・つかまって立つ | 3 |
| | ・つかまって歩く | 5 |
| | ・よじ登る | 6 |
| 移動する | ・膝をつき、押して移動 | 4 |

また積木が大きさ重さによって「安定位」を保っていることの感覚的認知もあるはずである。それがわかると喜び表情で(つかまり立ち)、(よじ登る)のである。(つたい歩き)もできる。

遊びのために必要な認知と認知を関連させてみせる反応行動である。

感覚的反応からはじまって、ここでからだ(物理的・空間的)で空間存在としての積木をとらえたのである。

その他に、子どもがモデルとしてみるところの他者と積木がある。しん君のクラスは十九人の友だちがいたが、しん君とちえちゃんを除く十七人はいずれも一歳以上—一歳五ヵ月までの先輩である。(自分より、安定している)(進んでいる)(親しんで扱っている)などの積木あそびの状態の認知を重ねていること。

その上先生が、同じ部屋にいて、つねに積木あそびを容認し、援助をしたりはげましを与えてくれる対象(積木)であるという

**表 2 積木を使ってみる その1**

試行する時期の1　1歳2、3カ月～1歳4、5カ月

| 区　分 | 行　動 | 発生順 |
|---|---|---|
| 積木固定の運動 I—1 | ・腰かける | 1 |
| | ・手をついて上り、立つ | 4 |
| | ・(並べてある上を)はう | 5 |
| | ・片足ずつ降りる | 6 |
| | ・(手をそえてやって)とび降りる | 7 |
| 積木移動の運動 I—2 | ・押して歩く | 2 |
| | ・押して歩いて方向転換 | 3 |
| | ・両手でもち身体で支えて歩く | 8 |
| | ・腰かけてバックする | 9 |

認知。これら認知と認知の結合が子どもの遊びを自発的なものへ導き、くり返しがはじまるのだ。

だが、この期の反応をみれば、知能的反応と非知能的反応の流動的段階というべきである。

### (2) 積木を使ってみる　その1
#### —試行する時期—

表2に示すように(歩行ができる)能力によって活動的になり、一段と進んだ行動が生じてくる。積木を自分で扱いうる満足があって(腰かける)とき安心と喜びの表情を、私は共感としてもった。イイネ！　と声をかけると喜々として応じる。つづいて全筋肉的活動を覚え試みる。(起つ)　(はう)　(降りる)をくり返すけれども運動機能未成熟であるから行動は慎重、緩慢でやっとできるという恰好である。両手をついて積木へ上ってもはじめ立つことはなかなか困難なのだ。(積木を押して歩く)などの積木移動は歩行の完成されていない子どもにとって行動的で大好きな遊びである。積木によりかかっているとき、体重がかかったら積木が動いた。その経験的発見と身体活動の調整がはたらいて、積木移動の活動となることは、子どもにとって驚くべき体験的な発見であり、それを動機としてのくり返しの試行がはじまる。

よし子が押して歩ける、と思ってみていると快感をすべる調子にのせてどんどん進む。そして壁までいきつく。それからどうにも動きがとれない。自分で方向転換できるようになるまで熱心な試行が続くが、できるまでにそんなに時間はかからない。

積木を動かす技巧とスピード感はこうして覚えられ、進度が速い。

**表 3. 積木を使ってみる その2**

試行する時期の2　1歳5、6カ月～1歳8、11カ月

| 区　分 | 行　動 | 発生順 |
|---|---|---|
| 積木固定の運動 II—1 | ・並べたくぼみへはいり込む | 1 |
| | ・ガタガタゆり動かす(すわって) | 1 |
| | ・とび降りる | 2 |
| | ・(3段並べてある上を)はう | 5 |
| | ・(　〃　〃　)歩く(つかまって) | 5 |
| | ・並べて両手バランスを取りながら歩く | 7 |
| | ・またいですわる | 8 |
| | ・ほそい厚い面へ立つ(つかまって) | 9 |
| | ・間隔あるところをわたる | 10 |
| | ・またいで歩く(凹面を並べて) | 12 |
| 積木移動の運動 II—2 | ・並べる(3個) | 3 |
| | ・かかえて運ぶ(腹と胸を使う) | 4 |
| | ・2個並べてあるのを押す | 11 |
| | ・積む(2個) | 6 |

(腹部で支えて持つ)この積木は両手をかけて持ちやすいが、一歳の子どもにとっては大き過ぎる。腹と胸で支える姿勢をとると持って動かせるのだ。移動にはある目的があって、「あそこまで持っていく」「○○ちゃんのところまで」ということと、身体活動の調整をためす快感があって意欲的な目的活動となる。

この段階までは一個の積木に反応する行動であって、どの子どもにも共通した動きである。個人的な行動の差や応用した他の反応行動はほとんど見られない。

年長の子どもの積木あそびの中へ入ってやっている場合、他の複雑な構成の一隅で順位4、5、6、7、上ったり降りたりして一個の積木中心に挑戦しているが、この一個の積木に対する認知のほかに見逃してならぬことは、上位の子どもの積木あそびをモデルとしてとらえていることである。この、他の子どもの遊びタイプの認知は、行動発達にとって大きな役割をもつと考える。

### (3) 積木を使ってみる その2

——試行する時期 二——

歩行が完成されると共に、積木に対する反応行動は徐々に目的活動と共に進められる。(とび降りる)——三六センチの高さから床面へとび降りることは、距離感と着地感が心のなかで充分たしかめられて、その上運動機能上の見込みがあってやってみるのである。この統合された行動が生まれるまでの反復練習と習熟のプロセスは、ひとりひとりの子どもの自己目的的活動によって支えられたもので、もう無目的衝動的行動ではない。

発生順3に(並べる、三個) 発生順6に(積む、二個)がある。並べることが先にできてのち積むようになる。これは一般の積木あそびでも見られる。二次元の操作のあと三次元の空間操作ができる。

(並べる)ときどこかへ焦点をもとめて、定位方向づけをする。やっているうちに気付く。はじめ両手でもったままで床に置いて並べる。横向き、反対向きを考えて並べるのは焦点をどこかに求めようとしている手さぐりの状態である。

△△ちゃんがあっち向きこっち向きの並べ方をしている。そこへやってきた○○君、さっさと置き方を換えている。きれいにそろったのをみた△△ちゃんは、この並べ方に気付いて二人の交渉はうまく成立した。

乱れた置き方をしなくなってくるのは、一貫したある判断をしていると思われる。個数は二—三個を扱うことができる。

(4) 積極的に使って遊ぶ

—使用操作の時期—

身体活動が活発で、状況とか目的とかに協応する自信を含んだ行動が見られる。目的行動に直進し積木あそびに意欲をまし、遊び時間も持続し興味はうんと深まる。

他の子どもが並べた上を歩いたり、自分の運んだ積木を他へ重ねたり、互いが互いの領域へ入り込んでも、構成が複雑になっていくことを諒解し、望んでいるようである。積木構成を連帯活動として黙認しながら積んだり動かしたり、人が積んだ上から跳ぶとか、積木を操作していて、仲間として追認している。こうした場合衝突は少なく、他を補うような配慮が働いて、まるで協同的かと思える。この場合他者意識より対物意識が強く、他者のしごとの上へ積み重ねるために、それが協同作業とみえるだけである。しかしお互いの関係作業を見つめながら、積木あそびの発展があるのは事実である。

使用個数は二—五、六個となってこの時期までに積木使用の原型が出揃う。

(すき間をくぐる)(けんすいをする)(人をのせ押す)などは、積木構成の作業中の小休止的な間に、構成のある型からイメージが発展していくあそびのようである。

大きな構築物のなかで、安心してはまり込んだり(お風呂だよ、という)じっと落ちついて腰かけていて、小休止がすむとまた次のエネルギー活動として展開する。

**表 4. 積極的に使って遊ぶ**

使用、操作の時期1歳10カ月～2歳3.4カ月

| 区分 | 行動 | 発生順 |
|---|---|---|
| 積木固定の運動 III—1 | 並べてその上を歩く、はう、両足とび | 2 |
| | ・すき間をつくる　くぐる | 4 |
| | ・ほそい厚み面へ立つ、歩く | 5 |
| | ・3段重ねた上からとぶ | 7 |
| | ・間隔のあるところをとぶ | 9 |
| | ・並べた上で片手片足をあげる(つかまって) | 10 |
| | ・けんすいをする | 12 |
| 積木移動の動動 III—2 | ・数個並べて走りながら押す | 1 |
| | ・3段に積み重ねる | 3 |
| | ・2個積み重ね押す、持ち運ぶ | 6 |
| | ・頭の上に持ち上げる | 8 |
| | ・すわって手で両端もち カタカタさせながら前進 | 11 |
| | ・人をのせ押す | 13 |
| | ・いろいろな並べ方をする | 14 |

(5) 自由な構成ができる

—自由な活動の時期—

説明ぬきでよいと思うが、自由に思いのままにいろいろな構成をたのしみ、ダイナミックな遊びとして発展させることができる。試行をくり返しながら二歳三ヵ月から二歳四ヵ月になるとこの段階にいたる。

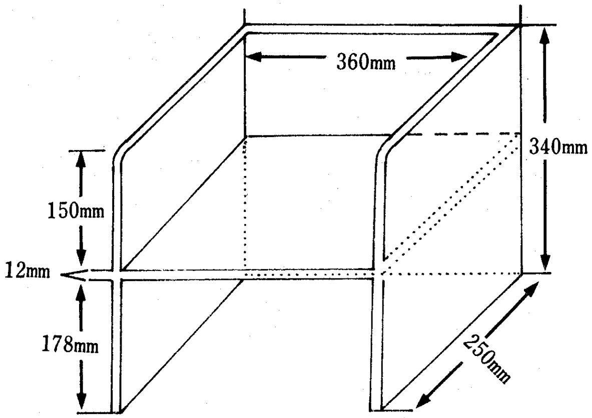
構成された積木を見ると、まるで四歳児か五歳児が遊んだかと思われるくらい雄大で意欲的な作品である。（記録は割愛）

## 積木あそびの発達

知覚—運動—操作の順で、積木あそびの発達をとらえることができた。積木を使いこなし、遊びに至るまでに二つの質的な段階に注目できる。認知中心の時期から試行する時期へ。わずか二ヵ月間で次の段階へうつる。二つは試行する時期から使用操作の時期へ。はじめの飛躍は、歩行が可能になったことによる行動範囲の広がり、運動の可能性による。次は二歳児の大まかな筋肉運動が協応的になり、こまやかな運動も発達して、物を扱う技量が発達したことによると考える。運動を重ねてはっきりした知能的反応に変わってきたとみることができる。

## まとめ

五ヵ月から一歳、二歳、三歳のみどり保育所の乳幼児全員を対象として観察した。また積木は椅子型を改良した大型積木を用いたが、一歳前後の乳幼児にも移動可能であり、構成遊具としての要素をもっている。




この観察の結果から、発達の段階は四つにわけられたが、その発達のしくみについてはなお検討する余地がある。

それ以上にこの観察で考えたことは、保育者が子どもにいかにして接近し得るかということである。

幼き者たちは自分の内からの欲求に支えられて自分で遊びを見つけ、積木を動かす作業をする。非知能的活動からやがてあるイメージを生んで作業が創造されていく。保育者はその瞬間子どもらにとって必要な助力（黙認のうなずき、肯定のめくばせ、賞讃のことばなど）ができなくてはいけない。しかしそのためには子どもらを、つき離していいてしかも子どもらがみえていなくてはならない。子どもたちが見えないほどべったり子どもにくっ付いていては、ほんとうに必要な賞讃と助力をみつけることができない。それでは子どもたちに有効に接近することはむずかしい。

（島根女子短大）

読書のすすめ

# 「母の肖像」

パール・バック著
新潮社

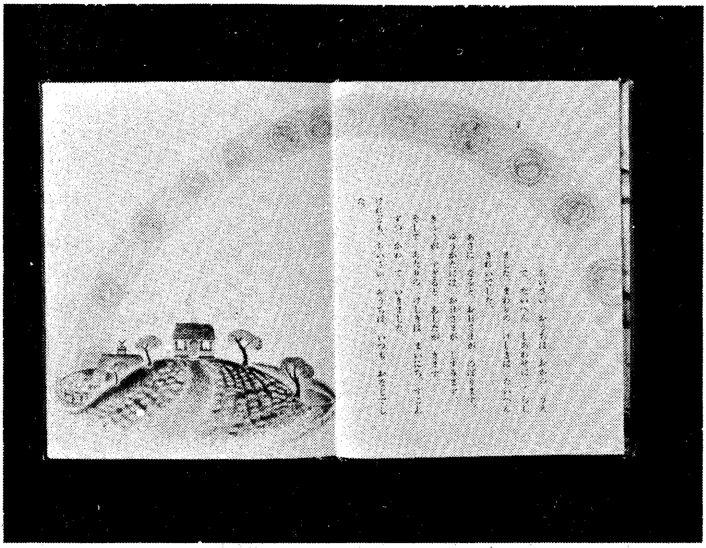
加奥愛子

最近読んだ本にパール・バックの「母の肖像」がある。読み終わって「ああよかった」と思わず口ばしっていた。ほのぼのとした感動を与えられた本である。人間愛の薄れていく時代なればこそ、人々は愛を求めてさまよう。しかしほんとうの愛は受けるだけでなく、与える所にあることをパール・バックの母を通して教えられる。子どものパール・バックは衣食住に関しての母の日常生活はもちろん、母の心、考え、行動を細かくみつめ、母の生き方を通して、いわず語らずの中に、人生観、母からの影響を受け教育されていくことを物語っている。子どもは両親の生き方をよく見ているものである。異国の恵まれない人のために、いくたの波乱の生涯の中にも、雄々しく子どもを育て、多くの犠牲をはらって、その土地に愛を捧げ骨をうめていく。人種を越え、国境を越え、ひたすら人類愛に生きた母の姿に感激する。しかし人間は凡人であるため、絶ち切れない悩み、性格の違う夫婦との問題などもありのままに深く洞察されている。昔も今も子どもにとって母はかけがえのない存在であり、それだけに母が子に対する責任は重大である。にもかかわらず最近は、心中、虐待、捨て子、子殺し等の悲しいニュースが新聞を賑わし夫婦の離婚もふえている。犠牲になるのは子どもである。施設にあずけられる子どものほとんどが母親の蒸発のためであり、三年以内にひきとりにいかないと、子どもは顔も知らないよその人と思ってなつかなくなるとのこと、親子の間で悲しいわくができてしまう。このような悲しい宿命になるまえにくいとめるものは、やはり母の生き方であると思う。私は二十三歳で夫が戦死をし三歳の子どもを育ててきたが、子どもを育てることが生き甲斐であったと思うが……。いろいろな人の生き方を学ぶのに、この本は何かを教えてくれる。電車の中でも手がるに読まれる小冊子である。

（大阪キリスト教短期大学）

# 子どものおひさま

津守房江



## 一枚の絵から

子どもたちが毎日の生活の中で書いた絵は、どれも大切で捨てられない。大作も小さな紙きれも大事にためているうちに、十年以上もたつとおびただしい量になった。数年前からこれらを一枚一枚じっくりと眺める時をもつようになった。「この絵を書いた時、この子はどんな気持ちだったのだろうか？」と思いめぐらし、書いたあとをたどり、そのころのようすを考え、生活記録を読み返してみた。これは、母親としての反省の時というより、共に生活をした者が、その時気付かなかった多くのことを新たに見いだす、発見の時であった。絵の中に表われていることが、言葉にもまた、遊びの中にも表われていることに気付かされた。子どもが感得した世界を、ある時は遊びの中に、ある時は言葉や歌に、ある時は絵にと、意識的に表現したり、無意識のうちに表わしたりしているのだと考えた。

これらの絵の中で、Yが二歳五ヵ月の時作った太陽の切り紙は、私にとって大切な「一枚の絵」である。Yは折り紙を持ち、はさみで紙のまわりに直角にきざみを入れ、紙を少しずらしてまた、はさみを入れる。これを繰り返して、

折紙の周囲全部に細かい切り込みを入れたものである。これをYは「おひちゃま」といって二枚続けて作る。私はこれを作っているYのそばにいながら、その時形が多少とも太陽に似ているので、Yがその形に対して「おひちゃま」と言ったのだと思っていた。しかし、私自身同じように紙を切ってみると感じ方は違う。その形に対してではなく、繰り返しはさみで切っていき、ぐるりと紙のへりを一周する。その繰り返しと回転の動きのイメージに「おひちゃま」と命名したのではないかと思う。このことは、子どもの感得した世界を考えるうえで大切なことと思う。子どもの絵には、たくさんの太陽が登場する。そして、それが「おひさま」と呼ばれることも興味深い。この生き生きとした太陽のイメージをとらえることはむずかしい。絵に、遊びに言葉に、表われたものを重ね合せ考え合せていくと、とらえ難いものの姿を少しく浮び上らせることができるであろう。

## はじめてのヒトと太陽

Yのはじめて作った「おひちゃま」で、この時の太陽のイメージを私たちは知ることができる。だがもっと小さな赤ちゃんはどんな感じをもっているのだろうか。あの太陽の光の中できげんよく出す「ウックン、ウックン」という声はその一つの表現であろう。

ウォルター・デ・ラ・メアは、子どものために書いた旧約聖書物語（阿部知二訳・岩波書店）ではじめて作られたヒト、アダムが目をさますところを次のようにおすように書いている

「……かれが目をひらくと、日の光は窓をとおすようにきらめいて射しこんできて、心はよろこびとおどろきで、いっぱいになった。かれは　けものや鳥や風や水の声を聞き、指は花々にふれた。日の光と熱をからだじゅうにあびてまっすぐに立ち、手足をうごかし、両うでを頭の上にさしのばした。……」デ・ラ・メアは子どものころ、自分が旧約聖書を読んだ時、心にあらわれた光景を思い出しながらこの作品を書いたということである。ちりの混沌の中にいのちをふきこまれヒトが形作られたと旧約のころの人は考える。このヒトがはじめて目をあけた時、このように感じただろうと詩人は感じている。小さな赤ちゃんが母の胎内の混沌の世界から光のある地上に生まれ出てきた時と似ているではないか。「心はよろこびとおどろきで一ぱいになり」まわりの物に手を触れ、「日の光と熱をあびてまっすぐ立ち上がる」。太陽はそのようなものだとデ・ラ・メアは感得

していのだと思う。

## Yのかいた絵の中の太陽と飛翔

Yが六歳八ヵ月の時にかいた六枚の絵の連作は、子どもの心が回転し、立ち上がり、光を沿びて飛び立つプロセスを示している。その時Yは熱が出て旅行に行けなかったので母と二人で留守番をしていたが、少し落着いた時枕元の画用紙に書きはじめる。

自分のペットの猫がぐにゃりとすわっている絵（図1）を書く。「アッそうだ、お嫁さん書こう」といって猫のそばにお嫁さんを書く（図2）。すると心に喜びを感じ、心が回転しはじめるのだろうか、輝いた冠をかぶった鳥をかき目を黄色にぐるぐるとぬる。（図3）次にふわふわと飛び上がりそうな鳥をかき（図4）次には羽根をひろげ飛び立ち、（図5）翼は光の粉をあびている鳥（図6）を書く。

この絵を書いた次の日すっかり熱も下がり、「あたし、ゆうべ夢みたよ。すごーく背が高くなってトート（父）カーカ（母）が飛行機で来て、それよりも高いの」といっている。小学校に入学して間もない充実した時期に、Yの心は「よろこびとおどろきでいっぱいになり」いろいろなものにふ

図　1

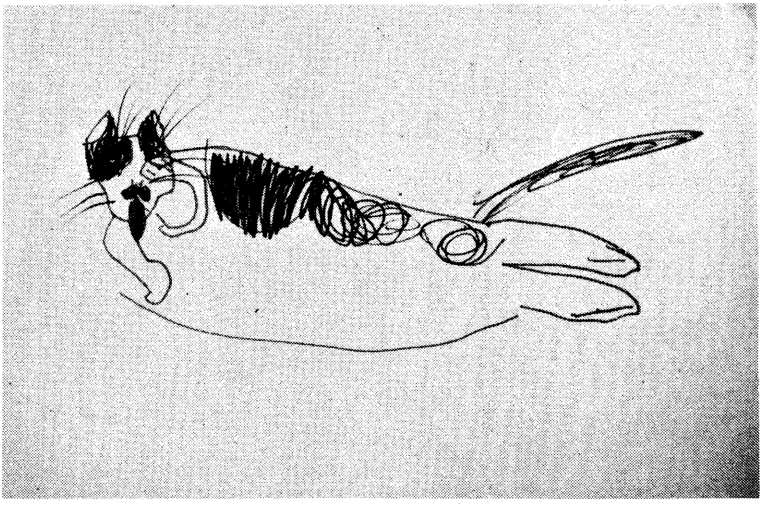


図　2

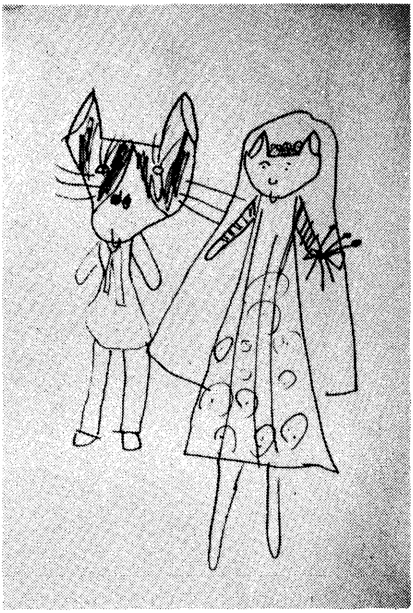


図　4

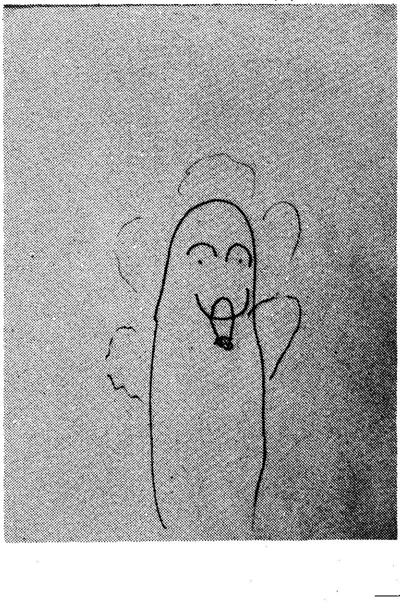


図　3

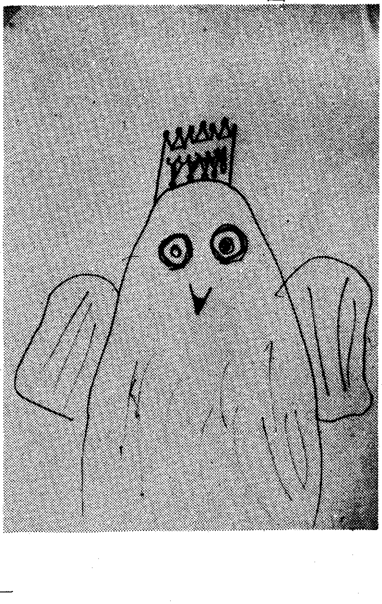


図　5

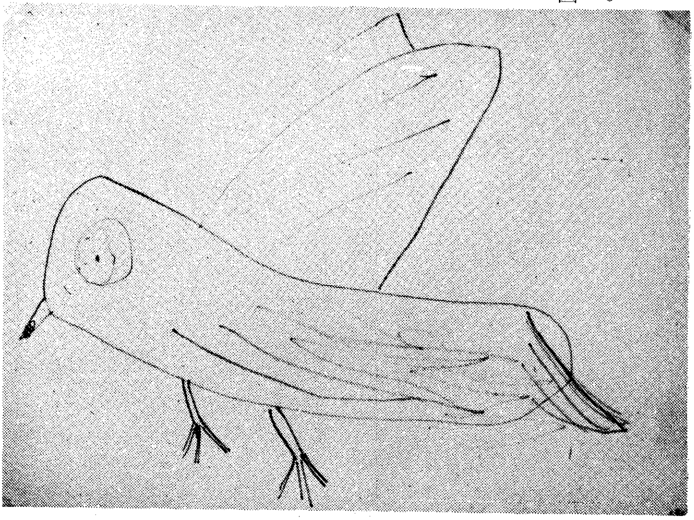


図　6

れ、「日の光と熱をからだじゅうにあびてまっすぐに立ち」（デ・ラ・メア）飛び立つ思いを経験していたのであろう。この連作の前後には、ちょうや鳥のテーマの絵が数多く出てくる。折紙で切ってはったちょうのことを、「ちょうちょとおひさま作ったの」といっているが、オレンジ色のちょうの中に、光をあびるちょうとおひさまも一緒に見ているのであろう。

## 童話の中で

「図書館ですばらしい本をみつけたから、おかぁさんに借りてきてあげた」といいながら小学校三年生の子どもが、佐藤さとる作「おばあさんのひこうき」(小峰書店)を持ってきた。一人暮しのおばあさんが家に舞い込んだちょうを見て、ちょうの羽根のように美しい模様を編もうと夢中になる。何もかも忘れて編んでいくうち、編みかけの羽根はピクピク動き出し編み進むうち浮かび上がってしまう。やっとの思いで編み上げて、おばあさんはこの羽根でひこうきを作って月の光の中を空を飛んで孫の住む家の上まで行く。おばあさんはその後一人暮しをやめ、好きな編み物もやめて、孫と一緒に暮すという話である。複雑な模様を編もうと熱中するおばあさんのことを、子どもは「すごいねー、うちのおばあちゃまみたいでしょ」という。「本当」ときょうだいたちは共鳴して、おばあさんの熱気と技術に感心する。おばあさんと空を飛ぶことは結びつかないようだが、何もない平凡なおばあさんが、一人である時思いがけない才能を見せて、老年に新しい自分の世界にはいることは私たちの見ききするところである。平凡に見えながら、子どもと共通する素朴さを持ち続けているこんなおばあさんは、飛翔することができるのであろう。この作品で、おばあさんらしく、やわらかい月の光の中を飛んだのがとてもいい。光に向かって成長するのは、子どもだけではなく、一生涯のこととして考えることだと思う。

「おばあさんのひこうき」の中で、おばあさんが示す熱心さが飛び立たせるのであるが、このことはジェームズ・バリの「ピーターパン」の中に次のように書きあらわされている。「あの夕方のピーターのように飛ぶことが出来るとがむしゃらに信じてしまえば、多分私たちだって飛ぶことが出来るかもしれません」「私たちが飛べないのに鳥が飛べるのは、ただ鳥が飛べるという完全な自信を持っているからにすぎません。なぜなら自信を持つことは翼を持つことに

なりますから」（木多顕彰訳・新潮文庫）といっている。がむしゃらな自信は、速度の早い回転のイメージであり、これが飛翔のイメージへと向かう。ピーターパンは物語として子どもが読むには、なかなか苦労する作品である。しかし作品としてでき上がる前に、バリが自分の可愛がった知人の子どもたちと一緒に公園で妖精の国の冒険ごっこをし、この遊びは次から次へと何年にもわたって続き、こんな中からピーターという性格が形作られたということである。（石井桃子訳・福音館書店・ピーターパンとウェンディ）作品がまず作られたのではなく、体を使っての遊びから出発したということは、どんなにか作者が子どもと共通のイメージをもったことであろうと推察できる。成長する子どもと長く一緒に遊びながら、バリの中にできた成長を見ることができる。

## 絵本の中で

絵本の中に太陽をたずねる時、くり返しばなしが浮かんでくる。これは絵本の中で同じような行動や場面がくり返し出てくるものである。たとえば「三びきのやぎのがらがらどん」「てぶくろ」「大きなかぶ」「わたしとあそんで」「おかあさんだいすき」等々、思いつくだけでも非常にたくさんある。このくり返しは上昇のイメージとなり、話そのものが単純なだけにくっきりと浮かび上って、子どもの心をとらえる。このことは24回保育学会の論文抄録に少しく書いたものである。こんなくり返しばなしの中で他の作品と違うところのある浜田広介の「こぶたのとことこ」について触れてみたい。これは仔豚のはじめてのおでかけを次のように書いている。（童心社「おはなしのほん」より）

「……よいおてんきでございます。
おにわをとおってまいります。
めんどりさんもみています。
ごもんをとおってまいります。
いぬがだまってみています。
きのしたとおってまいります。
からすがかあかあみています。……中略
ぶうぶうさんべんみいまわり
それからこんどはどうしよう……中略
すこしおやすみいたしましょう。　」

これはゆるやかな回転であり、きわだった上昇のイメージはない。むしろ、すとんとおかあさんのひざにすわって

いるくたびれた仔豚で話は終わる。こんな回転は輝やかしさはないが、ゆっくりとしたリズムが無理なく、日常的なものだと思う。太陽は絵の中にも出てこないで、一行「よいおてんきでございます」とあるだけであるが、それだけで暖かな日ざしの中での仔豚のさまよいが感じられる。これに対して、大きなスケールの回転をするものとして、バージニア・バートンの「せいめいのれきし」(石井桃子訳・岩波書店)。宇宙生成の過程をドラマのように転回する舞台としてみせ、時の経過のリズミカルな、ら線の先に、今という時が存在することを教える。

「これからあとは、あなたがたのおはなしです。その主人公は、あなたがたです。ぶたいのよういはできました。時は、いま。場所は、あなたのいるところ。……」このような宇宙のリズムと、小さな「こぶたのとことこ」のリズムは、共に一つとなって一人の子どもの心に、その子のリズムを作るのであろう。

## おわりに、

私たちは今まで、子どもの心が太陽を浴びて回転し、上昇し時には飛翔するさまを絵や生活や児童文学の中に見てきた。それは、成長の過程での子どものいだく成長感ということができる。樹々がなぜ太陽の方に向かって成長するのだろうかと不思議がるのと同じように、人はなぜ光に向かって成長するのだろうかと感嘆する。とはいえ人の飛翔はいつでも輝やかしいものとはかぎらない、時には傷つき混沌の中をさまよう、その混沌をつきぬけた時、やはり成長するものの喜びがある。

子どもにとって太陽というと、まず身体的健康にとっての大切さが考えられるが、人の精神の奥深いところに大きな影響をもっていて、人の成長を支えるものであると思う。これは私のもつ太陽のイメージでもある。人の成長のリズムという自然の中で最も神秘的なものをくるわせたり、押しとどめたりしないように願っている。

見出しカットは、私の好きな太陽の絵のひとつです。

「ちいさなおうち」(岩波書店) より

読書のすすめ

# 「障害児の早期教育」

村井潤一編著
ミネルヴァ書房

清水美智子

「発達は教育によって促進される」というのは事実なのですが、ある時期のある面の発達を促進することが、後の発達、特に全人格的な視野からみた発達とどうつながっているのか、早期の教育効果が、長期的にみて、果してプラスに働いているのか、マイナスに働く面はないのか、という疑問は、たえず残る問題です。早期教育の推進は、とかく発達促進的性格をもちやすいだけに、私どもは発達について、基礎的にかつ広汎に学ぶことが必要だと思われます。

私どもが、さまざまの発達障害児の実態やその教育のむずかしさにぶつかるとき、複雑な、そして長期にわたる人間の発達について、今日までに科学的に解明されていることはきわめてわずかであることを思いしらされるものです。このような障害児を別わくにおいて、発達とか教育とかをとらえていると、ついある種の思いあがりをもってしまいがちです。

村井潤一編著「障害児の早期教育」(ミネルヴァ書房)では、豊かな学識と、幅広い臨床経験をもつ編著者(発達心理学者)が、障害児を含めて統一的に人間発達の理論をとらえようとされています。また発達を規定する要因としての教育(養育)の条件、経験の性質を、基礎的実験的研究の資料と臨床的実践的とりくみの成果から、うきぼりにしようとされています。障害児教育と幼児教育を等しくふまえた視座から、昨今の幼児教育の動向に対する疑問も随所に投げかけられています。

狭い意味での特殊教育の本ではなく、また観念的な教育学の本でもありません。なま身の個性ある人間を見失っていない——したがってそこにはっきりした人間観・発達観・教育観がうち出されている——ユニークな発達心理学の専門書として、向学心のある方々に一読されんことをおすすめします。グループでの勉強会のテキストとしてもいいと思うのです。障害をもつ幼児に関心のある方にも、ない方にも、読みやすく有益な本でしょう。

(大阪教育大学)

# 読書のすすめ

「幼児のコトバ」　平井　昌夫著
日本文化科学社

「ことばの誕生」岩渕悦太郎他共著
日本放送出版協会

斉藤幸彦

わたしたちは、当り前のこととしてコトバを使って生活しています。しかし話ができるということは大へんなことであり、すばらしいことなのです。

外国語を習う苦労を考えてみてください。さんざん苦労をしても物にならない人がたくさんいます。ところが、子どもは生まれて一年も過ぎるとカタコトを話し始め、五歳で一国のコトバを覚えてしまいます。

コトバが使えるのは、人間だけですが、コトバは生まれた時からもっているものではなくて、聞いてまねをすることで覚えていきます。だから、まねの仕方がまずかったり、まねる手本がいけなかったりすると、満足なことばが育ちません。

「幼児のコトバ」は、著者の長年の研究と臨床経験から、子どものコトバの育て方について述べると共に、コトバの病気の扱い方についても、質問に答えるという形式で書かれた、やさしく、読みやすい母親むけのコトバの指導書・参考書といえましょう。

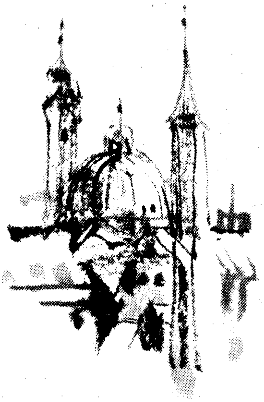
また、「ことばの誕生」は、子どもが生まれてから五歳ごろまでの間に、どのようにコトバを覚え、使うようになるか、十人の子どもの成長の姿を克明に記録し、その結果を学問的に専門家が分析・説明を加えています。

特に、年齢と共に発達するコトバと知恵づきや身体の成長を、医学・生理学・言語学・心理学の立場から、わかりやすく関連づけて述べてあります。コトバの発達のみならず、子どもの成長を知るうえにも、大へん参考になります。広く先生方や両親に読んでいただきたい本だと思います。

（横浜市立東小学校
聴覚言語治療教室）

# 思い出すままに

石島襄二



仕事の関係上、六五年の初夏から七二年の春にかけイギリス（ロンドン）、アメリカ（ニューヨーク）、インド（ニューデリー）の三ヵ国を、家族と共に「放浪」して来ました。ごくありふれた駐在員暮しで特に目新しい話題もありませんが、ロンドン入りした時長男が四歳でした。アメリカで生まれた長女はインドで三歳を迎えたため、子どもたちがそれぞれ異なる国々で幼児教育を受けた点が、多少変わった経験といえるかもしれません。

悲しいエコノミック・アニマルのさがで、仕事に追われあまり子どもにかまけてもいられませんでしたし、記憶の薄れた部分もありますが、家内と「こんなこともあったっけ」、「あんなこともありましたね」と話し合いながらメモしてみた思い出話をご紹介します。

## ☆　ロンドンの小学校

海外駐在員の常として半年前に先発した私が、家内と息子をロンドン郊外のヒースロー空港に迎えたのは、もうすっかり日足が短くなり、街燈の灯が名物の霧ににじんで見える秋のことでした。ヘソの緒切って以来初めて乗る飛行機が、いきなり北極圏回りのジェットとあって、緊張のあ

まり機内で食事もロクロクのどに通らなかった家内と息子は、あこがれのイギリスの地を踏んだというのに顔面蒼白、疲れ切って到着後二、三日は見物どころかまくらも上がらない状態でした。

しかし寝てばかりもいられません。まず息子の幼稚園探しにかかりました。私どもが居を構えたのはロンドン南郊のテニスで有名なウインブルドンにほど近い住宅地域でした。といっても左隣りは警官。右隣りは年金暮しのおばあさんといったあんばいで典型的な庶民の町。四歳八ヵ月の息子は近所の小学校に通うことになりました。その年の四月に上北沢の松沢幼稚園に入園したばかりの息子が、なぜイギリスで小学校に入学することになったかというとそれには次のような事情があります。

イギリスでは最初の義務教育、つまり小学校は五歳からとなっていますが、二歳から五歳までの幼児には私立のナーセリー・スクール（幼稚園）があります。ナーセリーには幼児が「モーション（大便）」を自分で訴えることができるようになれば二歳からでも入園できますが、月謝は最低でも八ポンド（当時の八千円）と決して安くありません。八年前イギリス家庭の約四〇％を占める中堅層の月収が一〇〇ポンド（同十万円）から一五〇ポンド（同十五万円）でしたから、一般家庭にとって子どもをナーセリーにやるにはひと思案いった訳です。

そうした親の悩みを反映してか、一応五歳からという建前になっている小学校に四歳からでも入学できる仕組みになっています。公立の小学校はいっさい無料ですから家計の苦しい家庭にとってはこれは大きな福音といえましょう。もっとも洋の東西を問わず、無理をしてでも子どもをよい学校にやりたいという親心は同じです。隣の警官も子どもを名の通ったナーセリーに入れたい一心から、まだベビーが母親のお腹にいる間に某有名ナーセリーに予約していたのには驚かされました。試験が無く申し込み順のイギリスでは別に珍しいことでもなかったようですが……。

一方、も寄りのナーセリーが満員だったことは、貧乏駐在員の私にとって息子を公立小学校に入学させる絶好の口実を与えてくれました。学校の名前はウインブルドン・パーク・インファント・スクール。ロンドン入りし十日目には手続きを終わって入学することとなり、当日午前八時指定通りのイートン・キャップと制服（お国柄でレインコートも含まれています）に身を固めた息子の晴れ姿に、両親は大満

悦で付き添って行きました。
ところが、チンプンカンプンの言葉を話す青い目の子どもたちの中にひとり残されることとなった息子はがぜん心細くなったと見え、さめざめと泣き出しました。両親の方も去るにしのびないのですが、長身金髪、典型的イギリス美人(これは家内も異議なく認めたところです)の担任のキャプラン先生は「親がいたのでは子どもがいつまでも依頼心を無くしません。言葉の障害があっても心配ありません」と断固たる態度。後に心を残しながら私共は学校を後にしました。何しろ第一日から下校時間は午後三時十五分、家内は時計とにらめっこで一日いても立ってもいられなかったようですが、校門が開いて姿を現わした息子は、意外にも朝と打って変わったニコニコ顔でした。なんでも先生以下二人の女性の助手がつきっきりで面倒をみてくれたとのこと、どうやら息子は先生に一目ぼれして、ついでに学校も好きになってしまったようでした。
授業を参観できなかったのでようすはよくわかりませんが、一年生の段階では教科書類はほとんど使用せず、アルファベットの手ほどき程度でやはり幼稚園の延長といった印象でした。非常に有難かったのは、給食時のテーブル・マナーをしつけてくれたことでした。それまで過保護で一人ではろくろく食事もできなかった息子が、スープの吸い方から、ナイフ、フォークの使い方まで覚えてしまったのです。イギリスの社会で学校と関連して強く印象に残ったことは、大人と子どもの生活を全く切り離して考えていることでした。学校でフルコースともいえる内容豊富な食事をとって来た子どもたちには、夕方五時半になるとハイティーと称するお茶とかなりボリュームのあるサンドイッチ程度の食事を与え、七時を過ぎると有無をいわさずベッドルームに追いやり外からかぎをかけてしまいます。その後大人たちは子どもに気がねなく、夜の時間を食事や社交などにあてるのです。

## ☆ ニューヨークの幼稚園へ

滞英一年余りでニューヨークに転勤となり、開通早々のJAL大西洋便で家族ともども海を越えました。緑の豊かなロンドンに比べると、ニューヨークはあまりにもほこりっぽく、ガサガサした感じでした。緑を求めた私どもはハドソン河越しにマンハッタンの摩天楼群を望むニュージャージ州のブルーバート・イーストにアパートを見つけまし

た。息子は今度は近くのロバート・フルトン・パブリック・スクールの付属キンダーガーデン(無料)に入園することとなりました。

アメリカの幼稚園はイギリスのそれと全く対照的でした。まず息子の服装が一変しました。マーク入りのブレザーに半ズボン、黒の短靴に膝までのストッキングというかしこまった服装が、ジャンパーにジーパン、白のソックスにバスケット・シューズというくだけたスタイルとなったのです。みかけはいっぱしのヤンキー・ボーイになったものの、息子はなんとかしゃべれるようになったばかりのロンドンの下町言葉「カクニー」から、急にアメリカ英語へと変わったので面くらったようでした。最初の二ヵ月間、息子は学校へ行ってもイエス、ノー以外あまり口をきかなかったのです。やがて先生(今度はミセス・コーリンという めがねをかけた陽気な典型的なヤンキーおばさんでした)から親に呼び出しがかかり、「あなたの息子はオシじゃないでしょうね」と冗談めかした質問をされたほどです。しかしそれから間もないある日、息子は突然アメリカ英語をベラベラしゃべり出しました。息子の頭脳をコップにたとえますと、毎日学校で少しずつたまっていったアメリカ英語がやがていっぱいになり、一挙に溢れ出たという感じでした。ただし、十歳未満の子どもの頭脳には記憶の引き出しが少ないのでしょう。だからこれまで引き出しにはいっていたものを捨てないと新しいものが納まらないらしく、もうHを発音しないカクニーの影も残っていませんでした。これは六九年にいったん帰国した時も同じで、一週間テレビの前にすわりっぱなしで日本語の新知識を吸収し終わったら、折角流暢になったアメリカ英語もみるみる忘れていってしまいました。

登校後は表門にかぎをおろしてしまうので、いうなれば子どもを朝から午後遅くまで丸抱えにしてもらった形のイギリスのインファント・スクールに比べ、昼食時、児童を家に帰すアメリカの幼稚園では、両親に対しかなり細かい要求が遠慮なくぶつけられて来ました。特にうるさかったのは散髪と清潔な服装で、着る物には上から下まで必ずアイロンを掛けて来るようにいわれました。虫歯の治療も徹底的に行なうよう求められ、治療費が高いので往生しました。その他少しでも問題があるとすぐに親に呼び出しがかかりました。

また男児には幼稚園時代からレディー・ファーストの観

念が厳しくたたき込まれ、女児に対し少しでも粗暴な振舞があると責任の所在に関係なく、男児側にピシピシ体罰(おしりをたたく)が加えられたのは、いかにもアメリカ的でした。

私どもは別に人種的偏見をいだいていませんでしたが、ロバートフルトン校には黒人児童がひとりも在校しておらず、白人の親たちは内心それを誇りとしているようでした。何人かいた日系人の子どもは例外的有色人種でしたが、概して成績優秀なので問題なく受け入れられていました。これは息子が小学校に進んでから知ったのですが、一学年三組のクラスを能力別でABCのグループに分け、一種の英才教育をやっていたのには驚きました。社会の階層化が古来定着しているイギリスならいざ知らず、「自由の女神」像をハドソン下流に臨むアメリカの一画でのことだけに、やや意外な感があったのです。

しかし、それ以上に興味深かったのは子どもを最低グループに入れられた親たちがきわめてノンビリしていたことでした。こんな時日本の母親がどんな反応を示すであろうかは想像に難くありませんが、アメリカのママには危機感が希薄なのか、やたらにあわてないのか、子どもを塾(そんなものは存在していませんでした)にやったり、家庭教師につけたりするようすはさらさらありませんでした。そうした親の態度を反映しているのでしょうか、アメリカの子どもたちが底抜けに明るくノビノビ育っていることが印象に強く残りました。

アメリカで最上グループに属し、秀才の誉れが高かった息子が、日本に帰ったらただの平均的児童に過ぎないことが判明し、改めて日本の水準の高さに驚いたり、がっかりしたことを、蛇足ながらご報告しておきます。

(OECDパブリケーションズ・センター)

# 聖ボニファチアス幼稚園での一年

真野輝彦

カーニバル

## 1 幼稚園

一つの事実は他の事実との比較において、その特色が鮮明になると思います。私の職場の関係で長男(知彦)は本年四月お茶の水幼稚園に入園までの約三年間を米国(ニューヨーク)、と西独(フランクフルト)で過ごしました。以下主として西独での彼の幼稚園生活を私なりに日本でのそれと比較しつつ、読者の方々の若干の参考にでもなればと綴ってみました。

長男がかよったのはフランクフルトの住宅街にあるカトリック教会の付属幼稚園で、五十がらみの小柄な尼さんの園長先生以下四人の女子の先生が、二十四名ずつのクラスを組織し、時に教育実習の方も二、三名くらいずつ来られていました。

運動場はさほど広くはありませんでしたが、おすべり、ジャングルジム、小さな小屋等すべて木製で安全性にかなりの配慮がなされていたように思います。

この幼稚園は特別の理由(両親が働いているなど)がないかぎり四歳児から入園を許されますが、長男の場合、㈠言葉を早く覚えさせること、㈡外国人で友だちが少ないことから、特に依頼して三歳で入園いたしました、そうでなく

ても大きいゲルマン人の中で体の小さな日本人は目立ちましたが、本人はさして違和感もなく過ごしたようです。年が小さかったのでむしろ自分の言いたいことが言えないとか、他人の言うことがわからないことが、そんな不自由がなかったのかもしれません。他の日本人のお子さんで五歳ぐらいで入園すると、自分の言いたいことが言えないので、幼稚園に行くのがいやだとダダこねられたという話を聞いたことがあります。それでも三ヵ月もすると、自分では話さないまでも、先生や友だちの言うことはほとんど理解していたようです。

登園時間は朝八時から八時半までに連れて行き、退園は原則として十二時、両親が働いている子ども、特別の事情ができた場合等は、五時まで預かっていただけるという、一部保育所的な性質ももっていました。

毎日の幼稚園生活のプリンシプルは、子どもたちが両親の下でのプライベートの生活から、社会人に成長していく過程の指導、すなわちゲマインデの構成人としての個人が、他の個人といかに調和を保ちながら生活するかを教えることにありました。したがって特に定められた時間割があるわけではなく、他人に迷惑をかけなければ教室にいようが、外で遊ぼうが、一人でいようが、グループで遊ぼうがかまわず、先生が注意するのはゲマインシャフトの調和を乱した時にかぎられていたようです。

この点に関してはお茶の水の方針と軌を一にしていると思われます。入園第一日目を終えた長男に『日本の幼稚園はどうだ』との問を発しましたところ、『幼稚園だから日本もドイツも同じだよ。ただドイツの方が室にいる時でも外で遊ぶ時でも靴をはき替えないから、めんどくさくなかったね』という答えには、ふき出してしまいました。

## 2 日記

次に幼稚園での一年間の出来事を日記をくりながら記してみましょう。

㈠六月十四日

午後八時　新入園児のための父兄の集り(出席は父親・母親半々程度)。入園手続き、準備の注意あり。(イ)入園以前にした予防注射とツベルクリン反応に関する証明書提出のこと。(ロ)通園カバン、雨、雪の日のための上ばき用意のこと。その他服装等は通常のもの。(ハ)食べ物、(甘いもの以外は何を持たせてもよい。園児がいつ食べるかは自由)

㈡八月十六日

幼稚園始まる。入園式等は一切なし。月謝納入(保育料

四〇ドイツ・マルク、その他入園費等なし)

(三)九月二十二日

秋の森へ散歩。水曜日。保育時間中。前日市電費用八〇ペニッヒ持たせるようにとのプリントによる指示あり。各クラス日をかえ担任の先生と園長先生指導。父兄付添なし。ドングリ、落葉拾いなど。

(四)十月九日

オモチャ、絵本の展示、即売会。於教会。園長先生が中心となり、他の先生方が手伝いに来られていた。売上利益は教会への寄付。

(五)十一月二十九日

夜八時より、父兄会。(イ)新役員選出。役員は一年間父兄を代表し、月一回、教会側と教会区父兄側の意見調整を行なう。役員は父親二名、母親二名。(ロ)クリスマスの過ごし方に関する意見交換。

(六)十二月六日

午後三時~四時 St. Nikolaus Ferien (聖ニコラウス祭)

恵まれない子どもたちを招いてサンタクロースのお祭。プレゼント(もう使わなくなったが、まだ使える玩具等をきれいに包んで)持参す。

(七)十二月二十三日

母親へのクリスマスプレゼントとして幼稚園で作った花びん(模様は子どもに作らせる)と花びんしきにひいらぎの枝をさして持ち帰る。

(八)十二月二十四日~一月二日

クリスマス休暇。

(九)二月十四日~十五日

カーニバル。子どもたちはそれぞれ仮装姿で通園。男子はこの日だけ許されるカンシャク玉の入ったピストル姿のカウボーイ、インディアンが多い。(知彦一日目は日本のハッピ、二日目カウボーイ)

(十)三月二十三日

飛行場見学。保育時間中。園長先生と三人の母親が付添い。新しく完成した、フランクフルト空港見学。動く廊下、ジャンボジェット機等。

(十一)三月三十日

イースター。卵のカラ(中味をぬいたもの)に自分ですきな色をぬり、木の枝にさげたものを作って来て、幼稚園の庭にかくされた、お菓子のバスケット(先生手作り)を皆でさがし持ち帰る。

(十二)四月十日

父兄会。子どもに対する体刑の是非について。時に必要というのが参加者のコンセンサスであった。

㈢五月十二日

十一時半〜十二時。母の日。母親が園児を迎えに行く時間を若干くり上げ、わずか十五分間ではあったが、子どもたちが歌をうたい、子どもたちが先生の指導で前日に焼いたクッキーを母親にプレゼントする。

㈣六月十六日

フェヤウェル・パーティー。日本への帰国の知彦のためにパーティを開いてくれる。同じクラスの園児が、自分の絵を書き、切りぬいたものを、先生が幼稚園をバックには り付け、名前を書き込んでくれる。園長先生は、いつも幼稚園でかけていた、ドイツの子どもの歌のレコードを記念にくださった。

㈤前記のほかに、担当の先生と話がしたい人は来てくださいという、先生との面接日が、毎月第二水曜日にレザーブされていました。

## 3 一年間をふり返って

『あなたは幼稚園(幼児教育)に何を期待されますか』。これは三歳の長男の入園依頼のため、園長先生と面接した際に問われ、以来二児の親としての私の脳裏をはなれない問題である。その時私は、『西独社会に早くとけこませ、小学校に進む準備をすることにある』と答えたが、園長先生の期待された正解は、既に述べた「個人をいかに社会人に育てるか、個人と社会といかに調和させるか」にあったことは、長男の毎日の通園生活、担当訓導との面接で繰返し確認された。ナチズムという全体主義を高い犠牲を払って経験した歴史的背景もあろう。個人と社会との調和の問題は、まず個人を個人として認めることにその出発点を見いだす。その上に立って個性をいかに社会生活とバランスさせるかの最初の場が幼稚園というわけである。大学生になっても、「学生だから」というあまやかしの生活態度(私自身もかつて経験した)と比較し、冷汗の出る思いがする。

以上は聖ボニファチアス幼稚園での短い経験を基にしたものであり、これがドイツの幼稚園教育と考えるのはきわめて危険である。当然のことではあるが、あえて付言して、筆をおきたい。

# 私の幼児教育論

喜田史郎

遊びを通して子どもは獲得するといわれる。また、子どもは遊ばせなければいけないという。子どもにとって、遊びが全生活であるというのである。遊びという言葉を使って幼児教育を論じていれば、すべて無難に通っていくからであろうか。そして、そのかぎりにおいて、幼児教育は、まことに楽しく、夢多き立場を堅持することができるに相違ない。

しかし現実の子どもは、果して、遊びの世界だけにとどまっていられるであろうか。遊んでいるだけで、大人の承認が得られるであろうかという問題が生じてくる。

子どもはまず模倣する。そして、模倣させられる。生得的に模倣することのできる子どもに課せられるのは、まず正しく模倣することである。うまくできないと、恐るべき反復強化を受けることになる。

—アッちゃん—　　…ハイ…

—アッちゃん—　　…ハイ…

なるほど、大人はこうして子どもと遊んでいる。よちよち歩きの幼児が、お返事をしたと大喜びする。うまく返事がかえってこないと、親の他人に対する誇示要求が傷つけられるのであろうか。

—オヤ、お返事は、アッちゃん—

恐るべき執念をもって、子どもに強要したりする。決った反応を求めるかぎり、ここには子どもにとって、遊びはないことになりはしないであろうか。

遊びは、仕事と区別される。結果を問題にしないのが遊びである。結果だけを問題にするのが仕事である。したがって、遊びは評価の対象にならない。遊びの過程は、子どもの内的なものだからである。

ところが、遊び中心であるべき子ども教育において、子どもはしばしば評価という社会的な圧力にさらされている。そして、大人は子どもを常に評価の目で見ながら、遊びを強調する。先生は、「遊ばせておけばいいんですよ」と説き、親は、「この子はおかしいので

はないか」と思いながら、ちゃんとやれるようにと、強圧を加える。先生も子どもに対して満足してはいない。いい先生であるほど悩み、自分を責めたりする。

正確な発音を要求される言語、逸脱・変調を許されない音楽リズム、完成しか認めない絵画製作。それでいて遊び中心だという。はっきりと、幼児教育は遊びだけではないといってしまえばどれだけ楽になるだろうと思われるのに、遊びという言葉に固執する。

絵画をやり玉に上げてみよう。もし遊びだけでいいのなら、作品はでき上がらないはずである。絵具を使って、色水を作ることに専念しはじめても、遊びだからいいではないかということになる。画用紙に向かわずに、顔や机に描きはじめてもいいはずである。表現の要求を画用紙にしか向けてはいけないというのは、大人の側の都合だけでしかない。

また、小学校教育と幼児教育が区別されるべきだとするならば、幼児の絵画作品が展示されるのは、根本的に間違っているといわなければならなくなる。作品は結果であり、制作は、完成を意図する以上、仕事以外の何ものでもない。

さらに、園児に同じ課題で描かせて、それをいっせいに教室に展示するのは、一体何事であろうか。ごく少数は得意になる子どももいようが、多くの子どもたちは表現意欲をそがれてしまうに相違ない。上手下手が一目瞭然だからである。遠足の絵、運動会、父親参観日のための父親の顔。幼児教育者の加虐精神をそんな形で補償しているとしても、親や子どもは被虐性の異常者ばかりではあるまいから、これは大問題である。

音楽リズム、体育表現舞踊の類でも、発表会がある。〝おたのしみ会〟などと称しているが、音痴、遅鈍の子どもと親にとっては、〝おくるしみ会〟であろう。

もちろん、子どもに応じて、何かの役割を与えるべく、先生方も苦心してはいよう。しかし、発表会をピークとして盛り上げていこうとする先生方の努力は、遊び中心の幼児教育論から発したものであろうか。

三歳児は、間違えても「かわいい」と許される。五歳児は、しかし「オンチ」「トンマ」というレッテルをはられるために登場することになりかねないのである。

これでもなお、遊びといわなければいけないのであろうか。それでいて、

「今日のお仕事は……」という言葉を使う。「おべんきょう」が園児に対しては「タブー」になっているのである。何か「キンダーガルテン」を学校教育の汚濁から守らなければならない楽園としようとするあがきをすら感じるのであるが。

たしかに、園児の親は、「この子は、お友だちと遊べないで……」と心配する。そして、小学生の親は、遊んでばかりいてと困っている。友だちと遊ばないでひとりで本を読んでいる幼児を、なぜ困った子と見るのであろうか。四、五、六、七歳と、子どもは連続過程をへていくのに、なぜ画然と区別されなければならないのであろうか。また、六歳二ヵ月の園児と、六歳二ヵ月の小学生とが、なぜ違った扱いを受けなければならないのであろうか。たかが制度上の便宜として引かれた線が、どうして厳しい意味をもたなければならないのであろうか。これは、大人の側の意図の問題である。伸び過ぎてもらっては困ると考える大人がどこかにいるのであろうか。小学校低学年の先生にも、先走る子どもを抑制しようとする人がいる。授業がやりにくいからあまり家で予習させないでくれと、母親が叱られたりする。いったい、教育を何と考えているのであろうか。意図的に設定された教育は、一定の形にそろった盆栽（凡才）を作ろうとしているのであろうか。

近年、早期教育が提唱されたり、またその反論が展開されたりしている。提唱者は、早期に教育を開始すれば子どもはすべて英才となるようなことを説く。反対者は、無理じいが誤りであると反論する。いずれも論拠はあるのであるが、これも大人の意図が先に立っている。視点を子どもにすえれば、どちらでもいいのである。

ところが幼児教育となると、教育ではない、保育であるといわなければならなくなる。保育は、保護育成であるから、教育ではないというのであろうか。さすがに、言葉の国である。漢字の字面にとらわれてばかりいる。

保育だから、文字は教えなくていいというのも、おかしいのではないだろうか。求めてくれば与えてもいいが、積極的に指導することはいけないという。園児に教えなくても、小学校にはいってから学習すればよい。入学時には読み書きできなくても、三年生になればちゃんと追いついている。差が全くないのである。……これが文字反対論者の論拠になっているらしいが、実

は大変なことを忘れている。それは、入学時に読み書きの不十分な子どもと親の立場である。必死になって追いつき、また間に合わさせようと努力する子どもと親の気持ちを考えれば、三年で差がなくなるという、横断面的な調査で物をいってはならないはずである。

三歳児でも、自分の持物に名前を書いてもらっている。シンボルマークもあるが、やはり文字である。母親の記名を見ていて、自分でも書いてみたくなるのが子どもである。なぜ教えてはいけないのであろうか。

もっとも、子どもは教育者の意図をよそに、自分勝手に獲得していく。いまどき、カビのはえた経験論にしがみつく者はいないであろうが、子どもは印画紙ではない。与えられたものを、そのままに刻みつけるほど、教育は低次元のものではない。大人は、高次元で獲得していく子どもを、もっと理解しなければならないのである。

さて、子どもに対する誤った考え方に、子どもを完全なものでなければならないとするのがある。もちろん、発達段階に応じてということであるが、これもおかしなものである。

完全主義者が子どもを見ると、不完全きわまりないものであるから、それを完全にしようというのであろうか。完全かどうかというのは、当然、結果に対する評価である。そこで、不完全な子どもが叱られることになる。完全基準は、いくら子どもに応じてといっても、大人の側のものである。

そこで、完全を押しつけられた子どもは、大人の承認を得るためにのみ完全を求めようとする。―デキマシタ―。そこで承認されればよいが、不完全を自認する子どもはどうなるであろうか。―デキナィ―子どもは泣いて逃げることになる。

実際子どもは、やりなおしが下手である。しかし、そこで満足してもいない。次の機会をねらうゆえんでもある。そして、不完全感が次への進歩を約束している。不完全だから、欲求を生ずるのである。

したがって、子どもは不完全でなければならないのである。恐るべき獲得能力は、その不完全さから発しているからである。そこには、未完全を容認し、過程を楽しむ遊びの活動が存在しよう。このあたりに、幼児教育の原点があるような気がするのであるが……。

（聖徳学園短期大学）

# 秋の遠足

川崎千束

秋の遠足は十数年来、いも掘りときめています。しかし、私どもの園では遠足というよりもむしろ保育の一環としての園外保育なのですが、とにかく秋に、目的をもって遠出することなので、子どもの側に立てば、名称はともあれ、同一のことであろうと、園外保育いも掘りについて記します。

五月に、母親たちの親睦の意味も含めて、春の遠足。三月に、むつみ合った同志、親子で別れを惜しむお別れ遠足。この他はすべて園外保育の形態をとり、一ヵ月に一度はどこかへ出かけます。国電、私鉄、路線のバスを利用するので、園児数八十名のわが園では経費は一回が三千円以内でこと足ります。

いも掘りに落着くまでには、なしもぎ、くり拾いに出かけた年もありました。その当時を反省してみると、保育者の心に、物珍しさへの期待と、遠足の主眼を行事的のみにとらえていました。わき道ながら、私は運動会は、練習こそコソコソながら、現在でも親子で楽しむ園の行事として行なっています。年間の保育の中にエポックメーキングなものがあってよいと思います。あの京の大文字、あれほど見事に晩夏の寂寥を表出するゆえに、移る季節への勤労の意欲がわくのだと、幼い日に祭りばやしに指折り待ったあのみち足りた喜びを忘れることができません。

## いも掘りをえらんだ理由

遠足の主目的を、子どもの経験活動と自然への融合にすべきであると、私の考えを決定的にしたのは、なしもぎはなしの棚は子どもの背丈よりも高く、とび上がってもぎとろうとすれば、なし園主の制止にあいます。したがってなしもぎの主人公は母親になり、子どもたちはお弁当の時だけいきいきするといった状態であり、くり拾いは、いがから脱けでたくり、

いがのままのくりが足もとにあり、一応子どもの活動はあるものの、しかし、まあ何と不自然なことでしょう。大人たちにはまいてあるとはっきりわかるほどにくりがころがっています。私は拾っていて心が暗くなり、子どもたちに申訳ないとわびたくなってきました。自然と子どもの心を冒とくしてよいものだろうかと。田舎の家に大きなくりの木が三本あって、夜半、風が荒れた朝でも、拾うくりの数は手かごに一杯ぐらいだったことを私は承知していたからです。くり林とはいい条、あたかも小石原のようにくりがころがり、こんなに安易に拾えたのでは、回顧する時があったら、大人への不信感をいだくことでしょう。

右の事情により、なしもぎ、くり拾いはとりやめにしました。

## いも掘りの実際

いも掘りは十数年来同じ農家にお願いしています。また、前もっていものつるや葉を刈りとらないように依頼もしておきます。長年のなじみなのでいも掘りにとって効率の悪いつるを残しておくことも、快く承知してもらっています。近年、新道が開け路線のバスを降りるとすぐ目的のいも畑です。いもを痛めないよう木しゃもじで掘り上げるので、子どもたちにとって、大仕事です。いもとの戦いです。三歳児でも見事な集中ぶりを見せます。父親の古い靴下を靴の上からすっぽりはいて畑へ入りますが、手袋はこの大仕事には邪魔になるのでつけないことにしています。〝先生、みて、こんなの〟〝先生、すごいでしょう〟こんな歓声に応対しているので、懸命に掘っても私の掘り上げたいもの数は四歳児にも及びません。掘り上げた後も、やわらかい畑土の感触を楽しんで、小さい盛り土を並べたりしています。

## そのあとで

家に帰ってから、重いいも袋を電話口にはこび〝ぼく、ひとりでこんなにほったの〟と父親に電話で報告。〝いも掘りを描いたの〟という絵の画面には、青空にお日様が二つ、いも掘りの手が怪物のように大きく描かれていました。

その子の経験活動と、その心にしみ通った確かなものが読みとられ、保育者の胸も、ひたひたと満足感に浸されます。

（東京家政大学付属みどりヶ丘幼稚園）

読書のすすめ

# 古い教科書

降矢震

近ごろ、さまざまなもめ事がふえてきました。精神病学者によると〝何でも自分本位に考え、悪いことは全部他人のせいにする。考え方が短絡的。すなわちヒステリー状態にある〟からだそうです。当事者たち、これをとりさばく人びと、批判する立場など、それぞれもっともらしいことをいうが、その見識の狭さ、心の貧しさにはただ驚くほかはない、と嘆く人もいます。

飯を食べながら、また通勤電車のつりかわにぶらさがりながらも寸刻をおしんで物を読んでいる人が多い。われわれは無類に読書好きな国民らしいです。読書は心を豊かにし、見識を広める効能があるはずなのですが、結果は逆です。読むものを取り違えているからでしょう。古今のすぐれた文藝作品、専門家の苦心になる人文、自然科学の多くの編さん物、新しい出版物でも、推薦書とされた良書はたくさんにあります。しかし恒常的な超ベストセラーは新聞、雑誌です。流行に便乗した評論や〝人が犬をかんだのでなければ記事にはならない〟という意図で書かれた記事ばかり読んでいます。しかも飯を食べながら、電車のつりかわにぶらさがりながら機械的に目を通していて、何で〝犬が人をかむ〟という常識的な〝ものさし〟が得られましょう。新聞、雑誌を見る時間の半分とはいわない。せめて十分の一でも筋の通った良書を読むべきです。飯は家中で和気あいあいと食べ、電車のつりかわには目でもつぶって静かにぶらさがっているべきです。

良書を選ぶ暇もないし、買う余裕もない方々には、昔使った教科書を読むことをおすすめします。必要なことを僅かな紙数に網らしようとするから、教科書の表現は簡略で味気ないものが多い。その上試験のための枝葉末節の暗記ですっかりいや気がさしているから用がすめば棚の奥

にほうりこんで見むきもしないのが普通です。ところが、これを試験とは無縁となった今、取り出して読んでみると学生時代には全く考えられなかった趣きが行間から滲み出てくるに違いありません。教科書だけに止まらず、唐詩選を買って読もうとか、歴史大系がみたいということにもなります。また泰西名画展へ行っても、教科書程度の西洋史の知識がしっかり頭に入っていればおもしろさもまた格別ということになります。

　専門教育の場合も同様ですが、一冊の教科書の原典は何百冊とあります。関連の書籍となれば無数に広がっています。数百ページ、百時間足らずのわずかな講義は、その科目への入門にすぎず、いかに将来自分で勉強するかを教えるに過ぎません。卒業後専門の分野に入れば、そのための座右の本はかなりの量になるでしょうが、縁のうすい部門とのつながりはかつて学生時代に使った書きこみでいっぱいのうすよごれた教科書、参考書です。専門外の必要事項はこの古い教科書の適当な場所に書き込めば特にカードなど作る必要も無い。この点、一般教養についても、家庭の主婦でも同じことと思います。教科書は無限に広がる知識の最初の手がかり、索引だともいえます。

　手あかでよごれ、すりへっていても自分で使った教科書はいいものです。全部忘れてしまっても読み直せばすぐに当時の細かいことまで思い出せます。書き込みを禁止する先生がいたが、これは間違いだと思います。書き込みは多ければ多い方がいい。現在は住宅事情から、古本はクズ屋に払ってしまえということになりますが、昔使った教科書だけは保存したらよいと思います。

　昨今人類の終末についての論議が盛んです。実際に大変なことらしいですが、いたずらにマスコミの餌食になって騒いでみてもどうにもなりません。〝朝に道を聞けば夕に死すとも可なり〟とか〝永遠とはこの一瞬を完全に生きることである〟ともいわれています。凡人のわれわれはこのように悟ることはむずかしいが、今こそ充実した毎日を暮したいものです。読書の第一歩として古い教科書を繰返し読むことをおすすめするゆえんであります。

（千葉大学医学部附属病院）

# 私の保育

## —戸惑いと失敗のなかで—

小林ちう

今日から新学期—子どもたちの笑い声、歩き方、目の輝き一つ一つに、年長組になったという自信と喜びが満ちあふれている。

「年長組」ということが、こんなにも子どもたちの心をはずませ、心にはりを与え、寛容にするということは、年長児を初めて受け持つ私にとって、驚きであり、発見である。と同時に、子どもたちのこのエネルギーが、これからどんな方向に動いていくのか不安である—こんな思いでスタートして三ヵ月たった今、日誌を読み返してみると、保育の根本的考え方、子どもたちの見方、かかわり方で、子どもたちの成長に追いつけず、戸惑いや失敗の多い自分を発見し、あせりの気持ちを感じる。

特に、Yたち男児グループの遊び方、グループ内の関係を通し、保育者として、それをどう受けとめ、どんな立場に立ったらよいか経験三年目の私に大きな問題として投げかけられてきたように思う。

「おーい、仲間あつまれー!!」 Yの一声で十人の男児が一団となって、庭へとび出して行く。

Yたちは、年少二学期の終りごろから固まっきてたグループで、「Yちゃんカッコいい」「Yちゃんライダーキックうまい」「Yちゃんやさしい」ということで、さまざまな遊びをする子どもたちが、Yをリーダーとして集まっていた。

年少のころ、その遊びは、土手をころげまわってのライ

ダーごっこが主であり、お弁当になると、スモックやズボン、ある時は、顔までも泥だらけにして保育室にもどってきた。その時の彼らの表情には、遊びきったという満足感があふれており、私も、幼稚園という時間と空間をもった世界を、自分たちで生活できるようになってきたYたちを頼もしく思ってみていた。

それが年長になると、Yたちの遊びの興味と関心は、私の思いもつかない方向に発展し、その扱いと助言に戸惑うことしばしばとなった。

Yたちは、園庭のブランコや鉄棒などの遊具に変わって、幼稚園と隣接した短大講堂の石段、園舎裏の田んぼで遊ぶことが多くなった。またある時は、短大校舎内、園外、用水路にまで活動の場を広げていった。

そうなるとYたちは、「迷惑」「危険」ということで、彼らにとってうれしくないことをほとんど毎日、日に何度か私から言われ、遊びを中断しなければならないことになった。

たとえば、短大のピカピカにみがかれた長い廊下を走りまわったり、学生用掲示板にライダーの絵をかいていると、「ここは、お姉さんたちのお勉強するところよ。ご迷惑になるから幼稚園で遊びましょう」と言われ、グループメンバーのNが初めて見る珍しい「かねちょろ」(かなへび)を幼稚園に持ってきたので、Nの案内で通園路途中の竹やぶに探しに出かけ、見つからずがっかりして帰って来ると、「幼稚園に来たら『さよなら』するまでご門の外に出ないお約束覚えてる?」と聞かれる。また、講堂横の用水路で、洋服がぬれないようにくふうして、くつ下もズボンもパンツもぬぎ捨てて虫を探していると、「大きくなったから大丈夫と思っても、ころんでおぼれてしまうこともあるのよ。それにパンツをぬぐのは、お風呂とお便所だけよ」などと言われてしまう。そこで遊戯室のマイクのスイッチを入れ、みんなでライダーの歌を歌っていると、「マイクは、お誕生会の時だけ使いましょう」と言われる。

このようなあと味の悪いYたちとの関係をプラスに変えたいと思い、遊びに入っていこうとすると、Hに「先生むこうへ行っててよ。ぼくたち遊んでるんだから」と言われてしまう。

Yたちと私と共通な気持ちをもつのにはどうしたらよいのだろう。

Yたちの興味や関心、ダイナミックになってきた遊びを、どう受けとめ、どう生かしていったらよいのだろう。

これらの問題を考え、解決の答も得られないでいたある日、こんな事件が起きた。

短大事務局から「学生用ロッカーのかぎの紛失が相次いでいる。どうも幼稚園の子どもらしい」という連絡がきた。そこでYたちがマークされた。なんでも話しそうなメンバーのDに、「Dちゃん、かぎのこと知ってる?」と聞いてみる。「うん知ってるよ。Yちゃんたち持ってきたの」

「Yはどうして何度話してもわからないのだろう。私の態度が甘すぎたのだろうか」こんなことを思いながらYたちを集めて聞いてみる。

「かぎのこと知ってる?」Yに目をあわせる。

「知ってる……」他の子どもたちからも次々と同じ答が返ってくる。

「前に、大学はお姉さんたちのお勉強するところだから入らないお約束したでしょ。お約束忘れちゃった?」

「覚えていたけど、かぎとる時忘れちゃった」Yの答である。

「Aちゃんは?」

「だってYちゃんとれとれって言ったんだもの」

「そうだよ、そうだよ。とらなくちゃYちゃん怒るんだよ」

Yは、ひとり孤立し、指をくわえたまま黙っている。

「じゃあみんなは、ご自分がいやだと思っても、Yちゃんが『やれ』って言えば何でもやるの?『赤いスカートはいて幼稚園に来い』って言えば?」

「やだよ、やだよ」

「じゃあ『かぎとれ!!』って言われた時、どうしたらいいか考えてみましょう。Aちゃん『かぎとれ!!』っていう人よ。Tちゃんどうしたらいいかやってみましょう」

「かぎとれ!!」

「やだよ、おまえとれ!!」

「おまえとれ!!」

「おまえとれ!!」

AとTは、笑いながら押し問答となる。

「Tちゃん、Aちゃんはかぎとることがいけないことだって知らないみたいよ。どうしたらいいかしら」

見ていた子ども側から、「教えてやればいい」という声がでる。

「……いけないんだよ」Tは、小さな声でポツンとつぶやく。

「そうね、いけないんだって教えてあげることはむずかしいわね」
「うん」
「むずかしいけど、これからがんばれるかしら?」
「がんばれる」「がんばれる」という答が返ってくる。
「かぎはどこにあるの?」
「草の中に隠してある……」
「そうだよ。ぼくたちの秘密の基地なんだよ」
「ぼく、5の3であくかぎもってるんだよ」
「かぎ」「隠す」「秘密」「基地」「数字」——子どもたちの興味の対象が浮きぼりにされる。

かごの中にいかにも子どもたちの興味をひきそうな円柱型の十三個のかぎが並べられた。そのかごを持って、事務局まで「おわび」に行く。

幼稚園と違った事務局のふん囲気、課長さんのむずかしい話は、子どもたちをシュンとさせた。

そして、かごを回し、中のかぎを一つずつ課長さんに手わたしながら「かぎとってごめんなさい」「メイワクをおかけしてどうもすみません」と、自分たちの考えたしかたとことば、神妙な顔つきであやまっていく子どもたちの姿に、私もなんだか胸がいっぱいになる。

「約束を守る」「迷惑になることはしない」という点は、保育者としてゆずれないにしても、わくをとび出していく子どもたちの力を、どんな目で見ていったらよいのだろうか。子どもたちの興味や関心をプラスの方向に生かすということは、具体的にどうしたらよいのだろうか。

いったい「それぞれが遊んでいる」年長児の遊びの中で、保育者はどんな立場に立ったらよいのだろうか。

相変わらずの戸惑いと、試行錯誤を繰返す私である。

ある日、ライダーごっこを終えたYたちが園庭で水遊びを始めた。Yがホースを持って水をまくと、他の子どもたちは逃げまわる。そのうちに「川」ができてくると、もはや、Yをリーダーとしたグループ遊びの姿はくずれ、Hはシャベルを持ってきて、川を深くしようと掘り始める。いつもYのいうままに動いていて主体性に欠けると思っていたNも、TやKたちと堤防作りに一生懸命である。Jは、「いいものあったぞ!!」と叫びながら、長いホースを砂場までのばし、AやBと砂のトンネルに水を通している。DとCは、ホースの奪いあいである。そしてYは、ホースの

水を高くあげたり、水で地面に穴が掘れる発見をひとり楽しんでいて、他の子どもたちを命令することも指示することもしない。

ひとりひとりの子どもがグループメンバーであることを離れ、得意の遊びを続けていく姿を見ていると、今まで私は、Yたちに対して非常に狭い見方をしていたことに気づきハッとする。

グループが固定したと思われたころから、「今日Yたちグループは、こんな遊びをしていた」とか、「ライダーごっこばかりでなく遊びの質を変えたい」というように、グループ全体の動きにのみ目をやり、個々の子どもたちの姿を見落としていた。よく見ると、子どもたちの遊びはグループを離れることもある。こんな時の個々の子どもの成長の姿を鋭く発見しよう。

また、Yは、すべての遊びにリーダーシップをとれるような絶対的なリーダーでないのに、過重な期待と責任を負わせようとしていた。

グループというわくをはずし、もう一度個々の子どもの遊びにかかわっていくことから始めよう。

私の性急なグループというものに対するとらえ方を反省するよい機会であった。

「先生は大変ですねえー。Yちゃんたち、いたずら坊主だから」——花つみをしながら何げなく言ったある女児のことばに、私の心の中、保育の姿勢を見通されたようで、ドキッとする。

子どもたちを暖かく包みこめる心の広さと柔軟性、安定した気持ちが、私に一番必要のことと思う。

あせらず、子どもの成長を信じ「見て待つ」という姿勢を忘れないようにしよう。

もうすぐ「山の合宿」——山の自然の中でどんな遊びが展開されるだろうか。

この機会に、ひとりひとりの子どもをよく見つめ、新たな面を発見したい。

（長野県立短大附属幼稚園）

# 「幼児教育の源流」（Ⅷ）

# ロバート・オウエンの幼児教育思想〈その二〉

山根祥雄

## はじめに

前回、オウエンの幼年時代から青年時代の経歴、ニュー・ラナークでの実践、さらに実践を総括し、「新性格形成学院」を構想している、かれの主著『新社会観』の内容などについて、いわばかれの生活史を繰るという方法でのべてきた。今回は、『新社会観』以後のオウエンの幼児教育思想についてのべてみたい。

オウエンは、産業革命の子であったとよくいわれる。つまり、かれは産業革命の進行とともに、産業資本主義の正・負両極の特徴をおびながら生きたということである。一方に、開明的な工場主の立場、他方に労働者の地平に立って資本主義体制というものの克服をめざす社会改革家の立場、この両方の立場を、オウエンは体験してきた。オウエンを歴史のなかで顕著なものにさせているのは、前者から後者への変容によってであり、産業革命の進行に対する危機意識にほかならない。

『新社会観』から『ラナーク州への報告』にかけては前者から後者への思想的変容の時期であった。かれの思想は、ニュー・ラナーク統治以降の貧困労働者や村人の改善から、かれらの合理的な教育と訓練による村・村人の改善、ひいては社会改革の思想へと深められ、広げられていった。こうしてオウエンはニュー・ラナークの実践の高まりと、成果の上に立って、諸改革の立法化へむけての建議を主軸とする行政闘争、ならびにその上からの改革へとつきあげるものとしての諸集会・文筆活動を展開していくのである。

## 工場法

産業革命段階の労働問題、これこそオウエンが終生かけてとりくんだ課題であった。労働条件、雇用の問題、労働価値の問題など、多岐にわたる問題であるが、いずれも、オウエンにとってぬきさしならない問題であった。そうした一環として、あ

まりにも有名で悲惨な児童労働を中枢とする工場立法の問題に対するとりくみもまた必然であった。

一八一五年グラスゴウで、スコットランドの製造業者の集会が催された。そこでオウエンは、綿花輸入関税低減の申請ならびに幼少年工労働条件統制立法化の決議案を提議している。前者には満場一致拍手の賛成を得るのだが、後者には業者の賛意を得ることはできなかった。オウエンは自己の個人的な働きかけによって、議会に訴える運動をはじめる。かれはロンドンへ出かけて指導的な議員に会い、議案提出をうながすが、商工業者たちの強硬な妨害等に会う。後に首相となるピール卿を通じて提出したオウエンの原案は、十歳未満の労働、十二歳未満六時間以上の労働の禁止、初等教育（男児女児ともに、読み、書き、かつ女児は裁縫、料理、家事一般）終了まで就業を禁止するというものであった。審議は遅滞し、原形をとどめぬ法案にオウエンは意欲を失ってしまった。これが教育その他の重要条項が削除された骨抜きの一八一九年工場法である。

同年、「工場制度の影響にかんする考察」において、オウエンは機械の導入によってひきおこされた次のような弊害を指摘した。つまり、労働の強度と時間の激増、教育、娯楽時間の減少、そして家庭生活での習慣の破壊など、産業革命進行による奴隷的使用への変化に伴う悲惨さに対して、国家の指導と費用負担のもとに教育を行なうことを提唱している。

## 幼児学校

ニュー・ラナークの統治は着実に進行した。そして一八一六年「新性格形成学院」の開設にあたり、「ニュー・ラナーク住民への講話」を行なった。この中で協同村建設のための村での施策の説明と、学院設置の目的を訴えて、村民の協力を要請している。この学院の目的は、単に外面的な習慣を直すことではなく、全住民の内面的性格を徹底的に改良することであり、個人の自主的な判断を尊重し、節度、慈愛をもって近隣の福祉に貢献することであった。そしてこの原理にもとづいて、単に教育施設だけでなく、共同体の組織を提案し、犯罪と貧困のない知性と幸福をもった社会の形成を訴えたのである。すでに一八〇九年ごろ着手され、一六年にいよいよ実施され、オウエンの渡米（二四年）まで継続された「新性格形成学院」とくにその幼児学校の評判は内外に聞こえ、「ニュー・ラナークの奇蹟」をみるために、多数の訪問者があとをたたなかったのである。

新学院の原理・組織・内容については、『新社会観』のなかで理論化されている。学院はむろんオウエンの構想する共同村建設の重要なモメントであり、国民教育制度の一環である。学院は村における家庭的、社会的習慣の欠如をカバーするための、

幼児、青少年、成人の利用できる、新性格形成のための環境設定である。村民にとっては、規律のとれた、ごらく、気晴し、休息の場所なのである。幼児にとっては両親がいつでもみることのできる遊び場が設けられる。五～十歳のクラスには読み、書き、算、軍事訓練、とくに女児には裁断、仕立て、料理なども教育される。実物教授が適用され、親しみのあるものから、有用・必要事項へと進む。説明は子どもの発達に応じてなされるが、子どもとの対話が重んじられる。ともかく授業はわかりやすく、おもしろいものとすることが肝要である。

教育の根本原理は、「仲間をそこなうようなことをしてはならない。仲間の幸福のために全力をあげる」ことである。あらゆる機会をとらえて、各人の利益、幸福、他人の利益、幸福の関係を強調することが教育の要点である。学院には学校のほかに、村人たちからの害悪の除去と矯正のために、講堂、教会なども設置される。青年や成人には夜間講義がなされる。

このような学院のなかにあって、幼児学校は、教育力からいっても、もっとも重要な施設であった。外来者の関心の的はここにあった。

歩行できるようになるか、一歳になると収容され、一～三歳の幼児は、昼食と夜間は住宅に帰される。幼児学校の第二の組の三～六歳の子どもたちは、寄宿舎に収容され、十歳以下の昼間小学校へ接続されており、幼児学校は子どもの基本的な習慣づけの学校でもあれば、小学校への準備学校でもあったのである。この幼児学校の二組は、年少組よりも年長組のほうに散歩が多いことが、相違点である。この二組からなる幼児学校では、子どもが生き生きと楽しく仲よく遊ぶことがまず第一とされる。校舎では二時間半、残りの時間は戸外の遊びに費やされる。集団保育の強調である。子どもは施設の中央に設けられた運動場で楽しく遊ぶのであり、雨天の場合、あるいは遊び疲れると、一六フィート、二〇フィート、高さ一六フィートの遊戯室が利用され、仲間と楽しく遊んだり、学習したり、午睡したりするのである。幼児の教室は階下の三室であった。この幼児教室には、動物の絵や地図それに自然の事物などが備え付けてあって、子どもは、好奇心に訴えられながら、刺激的に実物教授を与えられる。そのさい、生き生きとした、しかもうちとけた対話（お話し）が忘れられてはならない。性格形成のための合理的教育制度として、二歳以上の子どもにはダンス、四歳以上の子どもには音楽、集団的生活鍛練として軍事訓練、地図による地理が教育される。十歳以下の子弟には原則として書物の教育はしない。子どもはできるだけ戸外に出させて遊ばせる。親の幼児学校の参観もすすめられる。また、小学校は無料であるが、幼児

学校では月謝が徴収され、教材費にあてられる。徴収の理由はオウエンの言によれば、貧民学校と区別するために、とある。これは、オウエンの貧困労働者子弟の教育に対する慈善的立場を示す発言とみなすことができる。

幼児学校の教師には、最初、読み書きは苦手ではあるが、生来子ども好きで従順なブキャナンが担当された。保母にはヤングという十七歳の女性が任ぜられた。オウエンがかれらに与えた忠告は、「決して打つな、おどすな、ば言を使うな、いつも愉快な顔で、親切に言葉も優しく小児に話せ、えこひいきをするな、そして遊び仲間を幸福にするように行動することを子どもにたえず教えること」などであった。そしてかれらは、オウエンの忠告どおりに教育する。しかし、あとで述べるように、ロンドンに新しい幼児学校設置のこころみがあって、ブキャナンがまねかれた。そして学院の後任教師は、学院の三つの学校出身の十六歳の青年であった。オウエンにいわせれば、かれはブキャナンよりも効果を上げたといわれる。

幼児学校を中枢とする「新学院」は、オウエンの渡米まで九年間続けられるのであるが、相当な教育実績をあげたことは、オウエンや長男デールの言をまたずとも事実であったろう。ただし実際には、幼児学校で二歳未満の乳幼児が保育されたという確たる記録はない。三歳以上の子どもについては、一八一六年オウエンの工場委員会や教育委員会への報告にみられるが、三歳未満の乳幼児の記録はない。二歳以上の子どもに触れているのは、一八一九年リーズの視察代表団の報告書である。しかし三歳～十歳の幼児学校、小学校においての教育実践については、同じリーズの報告書でも子どもの間にけんかもないことを伝えているし、また子弟の教育に対する外来者の感嘆は『オウエン自叙伝』にものべられている。また幼児学校が他所で設置される気運からも察せられるように、「新性格形成学院」は、幼児学校、小学校を中核として、大きな成果を積んでいったように思われる。しかしながら、オウエンの幼児学校の実際のカリキュラム、教育方法、具体的実践、さらに収容人員、財政など具体的実践についてはいまのところ不明である。

さてオウエンにならった幼児学校設置のこころみがなされる。まずランズダウン侯、ブルウム卿などが中心になって、ロンドンに貧民の幼児学校が設立される運びとなった。オウエンの学院のブキャナンが校長に選任され、学校の全権をまかされた。しかしこの幼児学校は、ニュー・ラナークとよく似ていたが、子どもを打ったり、罰したりして古い不合理な精神とやり方で支配されてしまって、失敗に帰している、とオウエンはいう。第二のこころみは、クェーカー教徒が中心となって、ウィルダースピンを校長に迎えて設置されたスパイタルフィールドの幼

児学校である。オウエンはかれを熱心に指導し、やがてかれはオウエンの門弟に数えられる。オウエンにいわせれば、ウィルダースピンは、幼児教育を合理的社会制度のために合理的性格を形成せんとする第一歩として理解する精神をもちあわさず、ただ外的な形態の模倣だけである、と。

以上の二校をその手はじめとして、やがて幼児学校は、イギリスに定着していくことになるのである。

## 宗教否定と労働者救済

ところでニュー・ラナークの実践によってとみに高まったオウエンに対する一般の関心、とくに上層階級の人びとのオウエンに対する少なからざる賛意も、かれの宗教否定の表明によって変容する。

一八一七年、シティ・オブ・ロンドン・ターヴァン公開集会が催された。この大集会の目的は、人類のあらゆる本質的・永続的な進歩や改良に対する障害となっている宗教を克服しさることであった。オウエンが長い間自分のなかであたためてきた宗教否定は、ここに一つの結実をみるのである。オウエン自身、第二集会を生涯中最大の日であったと語っているように、かれはこの集会に相当な決意と覚悟をもってのぞんだ。そしてこの集会は社会に大きな問題を提起することになった。当時、宗教を否定するということは、オウエンにとっては必然的な結論であったが、人びとには少なからぬ衝撃を与えたことであろう。とはいえ、オウエンは宗教を全面的に否定したわけではないのであるが、この集会でかれは個人主義的自由競争と共同の原理とを対置させて、利潤追求の個人主義的な社会を変革すべきであるとした。

同年、オウエンは恐慌の原因と救済等について、下院救貧法委員会に報告した（「工場労働貧民救済委員会への報告」）。謀議をこらされて審問もなされなかったが、そこでは、貧窮の原因を機械の導入による労働力の価値低下とし、失業労働者に職を与え、機械を労働者追放のためにではなく、労働者に奉仕する手段とすることを訴え、そのために理想的な協同村の計画を示した。

## 大陸旅行

一八一八年、ジュネーブのピクテー教授の招きによって、オウエンは大陸に出かける。オルレアン公、フンボルトなど、当時パリ、フランクフルト、ジュネーブ内外の錚々（そうそう）たるエリートたちと会見している。オウエンはちょっとした「パリの流行児」であった、と述懐している。注目すべきことには、オウエンは名高い三つの貧民学校を訪れている。

まずオベルリン神父。これはオウエンの記憶ちがいで、ピエール・ジラードではないかといわれている。オウエンは自分の実践の工夫を、とくに幼少期の教育の重大さをジラードに語っている。ジラードも熱心に耳を傾けたようである。第二にペスタロッチの貧民学校である。ペスタロッチに対して、オウエンは、かれを旧式の教育原理を一歩進めているだけであるとし、純朴で実直な教育実践家と評価したにすぎない。ただし以後新学院ではペスタロッチの算数教科書が使用されている。さらには、後にのべるようにアメリカのニュー・ハーモニーでもペスタロッチの影響がみられる。第三に視察した学校はドゥ・フェレンベルクの貧民学校である。オウエンはここに数日滞在している。フェレンベルクはオウエンの考えに傾倒し、オウエンもかれに幼児学校の開設をすすめている。折からフランクフルトで皇帝会議が開かれ、かれは、社会の現状と将来の見通しに関する建白書を提出した。

## オウエンに対する反論

大陸がえりのオウエンをまっていたのは、かれの宗教批判に対する世間の反論であった。新聞などにおいても批判されたりしたが、かれの信念はゆるがない。当時、かれに反論した人びとのなかには、バーデッド、コベット、オコナー、ジョーンズなどがいた。近代経済学者ならびに教会関係者が多く反論をとなえた。オウエンの理解者、支持者も少なくなかった。ゴドウィン、ケント公あるいはリーズの公開集会でニュー・ラナークの実態を報告した人びとも含まれる。さらに、好意はもちながらも、二、三の点で反論した人びととしては、マルサス、ミル、リカード、ヒューム、プレイス、アトウッドなどの面々があげられる。意見の相異は、オウエンにいわせると次のようである。オウエンの主張が、国民教育ならびに国家的な雇用のみが合理的でそうめいな富める優れた人びとを創造しうる、というものである。これに対して反論の人びとの見解は個人主義的原理に立って大衆の国民教育はする、国家的な雇用はしない、というものであった。

以上のようにして、引続き工場の監督、性格形成原理の普及、工場見学者の接待、公開集会出席などに多忙であったオウエンは、ラナークを中心として下院議員候補者となった。しかし、運動不足と反対派の買収によって落選という結果に終わる。

## 『ラナーク州への報告』

一八二〇年ラナーク州の総会にあてて、ジェントルマン委員会のもとめに応じてなされた報告書が、『ラナーク州への報告』である。かれの『新社会観』とともに、とくに合衆国の注目を

あびた。この著作の中で展開されたのは、主要には合理的に計画化された共同体の社会組織の提示、貧困労働者の根本的な性格改善と恒久的生産的雇用を与えることによる貧困労働者の救済であった。

かれはまず経済機構について、消費と生産の歩調を重視した。犁から鋤耕作に変え、恒久的・有益な雇用手段を提供すること。さらに鋤農制度への改革、第三に労働生産物の交換のための価値標準を自然的な人間の労働とすることなどの改革であった。

この計画の細部は本著の第三部で扱われる。まず規模は三〇〇～二〇〇〇人、耕作面積八〇〇～一五〇〇エーカ、最小の労働費用で最大の生産物をあげる。さらに、「新性格形成学院」のような住民のための衣食住および子弟の育成と教育のための施設についてのべられている。それは『新社会観』よりも、環境性格形成理論は体系化され、一層のみがきがかけられた。また「学院」開始以後の実践をふまえて、一方でこの種の施設の大切さを強調しながらも、自分の実践に過渡的生活段落のための制度というふうな限定をつけている。

そして精神労働と肉体労働の分離に注意を払いながら、労働諸階級の個々人における広範な精神的・肉体的諸力の結合、私的利益と公共の利益との完全な一致などがうたわれる。さらにイングランドの労働階級の力と幸福とが、その完全でしかも自然な発展を、すべての他の国の力と幸福との同等な増大を通じてしか達成されないということを理解させる国民教育の強調がある。

子弟の、正しい育成と教育のために、合理的計画が必要である。まず、幼児や子どもの能力や素質の解明が課題であるが、この生来の素質に加えて、環境による諸印象が生涯の全時期を通じて個々人の性格を決定するのである。人間はまさに環境の動物なのである。したがって人間素質の改良のためには、生後の幼児に影響力をもつ環境改善が必要である。したがって諸施設の建設は、あたらしい世代の幼児や子どもに悪影響を与えるすべての環境排除の意味があるのである。幼児や子どもたちの育成・教育方法が施設の成否を決定する。むろんこの環境では非合理な個人的なほう賞、刑罰、競争の制度はすべて排除される。

さらに貧民に対する恒久的な有益な仕事の保障を国家政府に訴えるのである。なげかわしい圧縮は現在の分業と現存の一般的な社会的諸制度の確実にして必然的な結果なのであるからである。

『ラナーク州への報告』は、オウエンの経済上の見解、ならびに提案された村の産業組織についての明確な、総合的な表明であった。

一八一六年「ニュー・ラナーク住民への講演より」も共同社会主義へ向かっての一歩前進をものがたっている。そしてサン・シモン、フーリエなどに影響したといわれている。

一八二一年の三部作、『ラナーク州への報告』、『社会制度』、『窮乏原因の一解明』は、共同社会主義の核心を示す展開図であり、その後の社会主義実践の具体的な青写真をなしている。同年、最初のオウエン主義のロンドン協同経済協会ができた。

一八二四年リカードゥ派社会主義者ウイリアム・トムソンは『富の分配原理研究』において、オウエン的な協同組合の構想を提示した。二七年にはブライトン協同組合が設立され、翌年「コーポレーター」が発行された。

## ニュー・ハーモニー

そうこうするうち、ニュー・ラナークの工場は、オウエンの宗教批判表明以降、合資者アレンとの間で競争、不和が激しくなり、学院での教育の方法は後退し、宗教が強制され、ダンス教師が追放などされる。そこでオウエンは、学院を長男のデールにまかせ、次男のウイリアムをつれてアメリカに渡る。アメリカはかれにとって、従前からの綿花の買い入れ先であり、『新社会観』も普及し、また新開地として自由の空気に満ち、すでに理想の村建設の実験も、いくつかこころみられていた。オウエンは自分の理想を実現するために新天地をもとめ、インディアナ州のジョージ・ラップの宗教的協同村ハーモニー村を買いとって、一八二五年、二万エーカーの広さ、九〇〇名ばかりで、ニュー・ハーモニー平等村の建設に着手する。六月には一三〇名が在学し、かれらに村費で食事、衣服を支給し、無償教育を保障した。

翌年制定されたこの村の憲法には、権利・義務の平等、生活の実務と慰安における協同的結合、財産の共有、言語活動の自由、行為における誠実、親切、交際における礼儀、秩序、健康の保持、知識の獲得、最良のものを最も有利に生産し、使用する実施、法律の遵守などという原理がうたわれ、全村一家族の共産主義、教育の重視、二十一歳以上の成員の集会による立法、議会による行政などが規定されている。

ニュー・ハーモニーの教育に当たることを同意し、オウエンが村の教育を一任したのは、ペスタロッチの影響を受けたウイリアム・マクリュアであった。教育協会(ソサイアティ)の学校は、三教育階梯、四〇〇名近く在学者がおり、そのうち、二～五歳の幼児が約一〇〇名いた。やがてかれは、オウエンと衝突し、村の崩壊を早めたのである。しかし、オウエンは、ペスタロッチの教育理念をとり入れた。またスイスのペスタロッチ学校で、教育実践していたジョセフ・ニーフ夫妻を招いたりした。こうしてペスタ

ロッチの教育の理念はアメリカに大きな影響を残すのである。

しかしながらこの勇敢な共産主義の実践も、村民の質がまちまちであり、消費の平等であって計画的な生産の協同ではなく、ダンスや集会や対論はなるほどうまくいったにしても、生産の面からは混乱し、また意見の対立によって村を去るものもあり、しだいに無秩序が村をおおう。こういう状態になって、オウエンは一時独裁制を試みるけれども、財政難、不和、労働意欲減退などのために村の経営は失敗に帰した。オウエンは村を放棄し（二八年）、帰国の途につく。

### 協同組合運動

アメリカでの実践の失敗にもかかわらず、『ラナーク州への報告』に描かれた協同社会の福音は、イギリス国内に徐々に労働者の中に広がっていった。オウエンを迎えたのは、すでに記したように、ブライトン協同組合（二七年）、「コーポレーター」の発行（二八年）、などの協同組合運動の発展であった。一八三一年最初の全国的な協同組合大会が開催された。五〇〇を数える組合の多くは、労働組合活動に基礎をおいているため、オウエンは労働組合を自分の理想実現のために適当な手段であると考えるようになり、労働者あるいは生産者の協同組合が生産物を交換するための労働交換所を奨励するようになった。オウエンの考えでは、貨幣の存在こそが人びとの困窮と市場不足を生み出すのである。そこで、一八三二年ロンドンに「国民公平労働交換所（ナショナル・エクイタブル・レイバー・イクスチェインジ）」を設立した。そこでは交換のために貨幣ではなく、直接商品の生産に投ぜられた労働時間を示す労働券を発行した。この券によって、生産者組合や労働者個人は他の生産物と交換するものであった。この制度を用いることによって、中間商人は排除され、労働者は正当な報酬をえ、失業者も生産物を交換し、生産と消費の不均衡は解消するとオウエンは考えたのである。しかし実際問題として、一般の市場価値と労働価値とが併存するはずもなく、一時はかなりな盛り上がりをみせるがついに倒産する。オウエンはこうして、資金を失いはしたが、かれの熱意は弱まらない。かれは集会での演説、雑誌で、あくことなく自分の理念を訴えてやまなかった。オウエンは理想実現のために当初資金調達を金持ちの慈善に期待したが、やがて労働者に訴え、労働者の中に支持者を求めるようになる。

### 労働組合運動との提携

一八三二年の選挙法改正のさいにも、オウエンは協同組合、労働組合、労働交換所の指導的立場にあった。この選挙法に反対する労働者は経済闘争を展開し、オウエンも今や労働運動に期待をかけたのであった。三四年には一〇〇万組合員の全国労働

組合大連合も生まれ、かれは議長となった。この組織は単に労働条件を改善することを目的とするだけでなく、労働者の統制による協同組合組織によって、資本主義を抑圧することをもねらっていたのである。

この大連合は、組織確立後まもなく、資本家の反撃と政府の大弾圧によって一年もたたないうちに、瓦解してしまった。オウエンはその後の狭隘なストライキや階級闘争にあきたらず、また組合幹部ともそりがあわず、しだいに現実から遊離して、ストライキではなく、説得・教育・宣伝をめざす内外合同産業人知識協会を設立する。このようにしてオウエンと労働階級との提携は、一八三四年まででであったといえる。以後労働階級はチャーチズムへと歩を進め、オウエンは再び超階級的な説教家となり、五三年、八十二歳のときには心霊論に改宗して、伝導者となってしまった。五八年、社会科学協会の演壇上に倒れ、まもなく郷里で八十七年にわたる波乱に富んだ生涯を閉じた。

## おわりに

オウエンの生涯と思想は、以上のべてきたように、かれの諸実践と切り離して考えることはできない。かれは自己の生活体験を学説へと積み上げ、さらに自己の学説を実践のなかで血肉化させていったのである。一生を通じての著作、集会、パンフレット、機関誌、定期刊行物などの多方面な活動の豊富さが、その証左である。

さて、かれの教育思想がまったくオリジナルなものでないことはいうまでもない。しかしかれの教育思想は、性格形成論として特徴づけられる。

性格形成論は、環境教育論であって、二つの方向を導く。一つは、白紙説（タブラ・ラサ）を思わせるような、人間にとっての無限な教育可能性であり、環境性格決定論からする人間性格に対する寛容である。二つは、積極的に人間教育による社会改革である。その社会は競争や不和のない万人の幸福と福利をもたらす社会である。この社会改革論は、やがてオウエンのなかで共同社会主義へと醸成されていくのである。二つの立場からすれば、現在つくられている人間性格は、個人的な責任のものでないこと、さらに悪環境の設定が導かれる。悪環境の排除という側面から労働者に対する訓練と雇用の保障が、新環境の設定からいえば、国民教育制度の整備がうたわれる。

この性格形成論の二つの立場は、ともにあいまって、幼児の柔軟な可塑性への着目によって、幼少期からの質的・量的教育の保障を必然的に要請する。このいみで性格形成論は、かれの終生の課題であったのであり、安易な性善説の設定ではなく、人間形成と社会との不可分でダイナミックな把握であったので

ある。

産業革命の進行に伴なう人間疎外と貧困を前にして、「新性格形成学院」は、オウエンの性格形成論の実践であった。ここでの実践の成果がオウエンの性格形成論を迫力あるものにしているのであって、とくに一～六歳の幼児学校は注目すべきである。幼児学校はオウエンの性格形成論から必然的直接的に生みだされたものであると同時に、産業革命による家庭破壊に対する保育施設の普及という時代的な急務でもあったのである。

イギリスの幼児学校は、フレーベルの幼児園設置に先立つこと四半世紀、オウエンによって着手された。オウエンの後、先に紹介したように、ロンドンとスパイタルフィールドに幼児学校が設置される。以後慈善事業の色彩濃く、「幼児学校運動」が展開され、次第に普及拡大された。三三年からは幼児学校へも補助金が支出されるようになり、幼児学校数はそんなに多くはなかったが、かなりな成果をあげたことであろう。しかし、幼児学校では当初のオウエンの理想な教育方法が見失われ、よくない意味での「学校化」に拍車をかけることとなった。それにもかかわらず、オウエンに先鞭をつけられたイギリスの幼児教育は、ウイルダースピン、ストウ、メーヨー兄妹などの尽力によって次第にイギリスに定着していく。

最後に本稿のまとめとして、オウエンの性格づけをはかりたいと思う。

オウエンの思想の深まりなり、発展、なかんずく、かれの社会改革への前進は、『新社会観』から『ラナーク州への報告』にかけての数年間の諸活動に集約されているように思われる。むしろこの期間の活動のなかに、かれの社会改革のエネルギーの燃焼と、ダイナミックな変化があったことは否めないように思う。

にもかかわらず、オウエンの一生が、開明工場主から社会改革家への発展として特徴づけられるにもせよ、オウエンにとってむしろ問題は根本的に、客観的条件として労働運動の未成熟という歴史的規定もあって、労働者の、あるいは労働のもつ人間自己形成力というものを見失っているということである。つまり、あくまでも労働者へ向かう真摯な態度なり、実践なりは、同時代の「最大多数の最大幸福」原理の功利主義的思想家たちとは一線を画するものであった。

しかし、かれの営みは組織によらない個人的営為であり、それゆえにするどくもあったが、社会改革への広がりと力とは十分実現されなかった。事実かれの漸次的社会改革という立場は一生貫かれている。またオウエンの訴えた相手は、決して労働者自身ではなく、おおむね社会の指導者であり、議会であり、知識人であった。しかも、人間性に関する知識ないし、性格形

成論の普及が直線的に社会改革と結びつけられたのである。さらに個人主義的利潤追求の自由競争と私有財産制との否定にまではのぼりつめるが、貧富共存の思想にとどまっている。こうしてオウエンの社会改革論は資本主義社会批判までは到達しているけれども、その後の社会改革の実現有効な展開と展望をわれわれに教えてはくれていない。

（広島大学）


## 主要参考文献

**原著書**（オウエンの主著は以下の二点に収録されている）

(1) R. Owen, *The Life of Robert Owen.*

(2) R. Owen, *A New View of Society and other writings,* intro. by G. D. H. Cole, *Everyman's Library.*

**邦訳書**

(3) 五島茂訳『オウエン自叙伝』 岩波文庫

(4) 楊井克巳訳『新社会観』 岩波文庫

(5) 永井義雄・鈴木幹久訳『ラナーク州への報告』（社会科学ゼミナール48） 未来社

(6) 渡辺義晴訳『社会変革と教育』（世界教育学選集） 明治図書

**単行本**

(7) 五島茂『ロバート・オウエン著作史』（大阪商科大学研究叢書） 一九三二年

(8) 五島茂『ロバアト・オウエン』 三省堂 一九三四年

(9) 森戸辰男『オウエン・モリス』（大教育家文庫21） 一九三八年

(10) 芝野庄太郎『ロバート・オーエンの教育思想』 御茶の水書房 一九六一年

(11) 白井厚『オウエン』（世界思想全書11） 牧書店 一九六五年

**研究書**

(12) 柳久雄『生活と労働の教育思想史』 御茶の水書房 一九六二年

(13) エンゲルス著 大内兵衛訳『空想より科学へ』 岩波文庫

(14) クループスカヤ著 勝田昌二訳『国民教育と民主主義』 岩波文庫

(15) ラスク著 田口仁久訳『幼児教育史』 学芸図書 一九七一年

その他イギリス教育史研究書、オウエン研究論文参照。

# 一学期をふり返って

今井由美子

「さあ、あしたからは夏休みで、幼稚園はお休みだけど、みんな お家で元気に、過ごしましょうね」という、H先生のお話をあとに、いつも通り帰っていく子どもたち、夏休みってわかるかしら、明日の朝、幼稚園に行こうと、とび起きる子は、いないかしら。などと考えながら、新米教師として、もう三ヵ月が経過したことを、改めて感じるのでした。

私の場合、新入園児（三歳児）十七名を、ベテランのH先生と、二人で受け持つという形でスタートしました。

入園式もさることながら、その翌日は、いよいよという期待と不安の入り混った気持ちで子どもを迎えていると、どうしても母親と別れられない女児が一人いました。私はまるではれものにでもさわるように、無理に離すことはない、と自分に言い聞かせながら、おもちゃを手にして戸口までいったのですが、予測はみごとにはずれ、お母さまのうしろにかくれるばかり。さあどうしよう、と思っている所へいらっしゃったH先生、

「さあ、いらっしゃい。遊びましょ」

というなり、むずかる彼女を抱き上げると、そのまま外へ。なんのことはなく彼女は遊びはじめたのでした。ある状況にぶつかった時の振舞い方は、一通りでは決してないということを、まず最初に感じたこととして、私の胸に焼きついているのです。

幼稚園という新しい環境に親しみ、緊張→安定へと変わり、本来の自分の姿をあらわすようすが、各人各様、これほど個性的なものだとは、今まで想像もつきませんでした。いったん遊びはじめると、もうそのことを夢中にやりとげる子。友だちのしていること、もっているものを、すべて保育者の手によって、自分のものにならないと気のすまない子、はでなけんかもするけれど、片時も離れることのない仲良し二人組、またこの三ヵ月では、自分を出しきれなかった子などさまざまです。

子ども同志のふれ合いや、保育者とのふれ合いの中で、この姿は変容し、幾重にも大きなものとなっていくのでしょう。この子どもへの接し方は、別の子どもには通用しないのです。

子どもたちが帰ったあと、私はよく、部屋や砂場を茫然とながめまわすことにしています。すると不思議と、部屋全体や、しまい忘れたおもちゃなどが、何か語りかけているように感じます。Yちゃんにとって、黒板の溝は、高速道路なのです。その片すみのチョークの箱に、青い車がちょこんと入っているのです。また、積木の下の方から、お人形がでてきました。「今日はひどい目に会った。Tちゃんはちょっとあれていましたよ。私の髪をむしり取るんですよ。そのあげくこれだから」あらっ！ ブロックが足りないな。と探していると、コーナーの木箱の中に、ゴッソリと。きっと、冷蔵庫にごちそうをたくさん入れておいたのでしょう。あら！ ここにもある。コーナーのわきに、ステッキの形をしたブロックの傘が、かかっていました。そういえば、「あら、あめよ、あめよ」と、タオルかけにかけてあったタオル、それにふきん、さらにははいていたくつ下までぬいで、コーナーにとりこみ、「それじゃあ、私、お買い物にいってくるわね」と、その傘をさして遊んでいたことが、思い浮かんでくるのでした。

砂場の中や、部屋の入り口に、置き放しになっている、水や砂の入ったビニールの袋。お米屋さんや、ごちそう（コーヒー、おにぎり）の容器として、使われていたのでしょう。

四月の末、前夜の強風で、桜の花がみごとに散ってしまい、お山への道はピンクのじゅうたんを敷きつめたようでした。さっそくビニール袋をもって拾いに行くのですが、拾う意味はさまざまです。袋いっぱいにつめこもうと、必死にかき集める子、「先生拾って」と、自分では拾わない子、拾い集めたのを、散らすことに喜びを感じる子、さっそく砂場でごちそうとして使う子。その中に水を入れると、結ぶようにいうのです。何だかわからないままに、その通りにすると、袋を軽く押しながら、うれしそうに、「金魚が泳いでいるよ」と話してくれた子もいます。翌日は、ハッパを入れて、緑色のお魚にした子もいました。一緒にみているこちらにまで、そのすがすがしさが、伝わってくるようでした。よく、迎えにいらっしゃった父兄が、子どもの手にしているビニールの袋に、苦笑しているのを見かけます。大人の目には、単に水の入ったビニール袋であっても、子どもにとって、いろいろな意味をもっていることが、わかるのです。幼稚園で気に入った遊びを

そっくりそのまま、家へもっていこうとするのは、当然の欲求といえると思います。

子どもの遊びの中で、物は多種多様の変化をし、意味をもつのだということを知り、さらに、その一つ一つが、子どもの心の中に、生きていると感じられます。私にとって、むろん柔軟な想像力が大事なことも認めますが、それ以上に、こうした子どもから出た遊びを感じ取る心は、いつまでも失いたくないと、日々感じてなりません。

子どもたちが、慣れてくるにつれ、「そこに登ると危いわよ」とか、「走らないで、じょうずにお部屋まで帰りましょう」「ダメ！　お友だちをぶったりしちゃ」などといった口数が多くなっていることを感じます。ですからなおのこと、遊ぶ時は、小言をいう先生から、一緒に遊ぶ友だちへ大変身という意気ごみで、遊ぼうとつとめてきました。ところが、やはりこの園内でも限界を感じることがあります。そんな時、中学校のグランドまで足をのばしたのです。何もない広がりを前にすると、自然と足は早くなるのです。飛行機になって空をとんだり、競走もしました。パンクして捨ててあったボールを、思いっきりけっとばしもしました。がけをよじ登ったり、かけおりているうち、ウルトラマン太郎も次郎も登場して、意外な仲間意識が生まれもしました。幼稚園にはない赤い花を、必死になってつんでいる女児たち。

大自然とぶつかり合っている子どもたちには、限りないエネルギッシュなものを感じます。

☆　☆　☆　☆

何かまとまりのない、断片的なことになってしまいましたが、私にとっては一学期のよい反省の機会であり、さらに、これからの保育者としての自分のあり方を考える、かてとしていくつもりです。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

読書のすすめ

# 感じるこころを育てよう

松隈玲子

昨夜はじめて読んだ本を、夢中で覚えて今日話す、いわば、インスタントの食品でどうにか食卓をとりつくろったような日は、何ともわびしい思いと、子どもへのすまなさにかられます。

日々の保育の合間をぬって、子どもに与えることだけを目標に本を求めるのでなく、直接そのまま、読みきかせ、語りきかせるものでなくても、保育者が自ら感動し得る作品を求めて、ゆたかな感情を育てたいものです。

子どもと本との出合いが、文字のひろいよみの指導においてなされるのではなく、保育者が感動した物語を心の中で何度もあたためながら、慎重に時を選んでの読みきかせ、語りきかせでありたいものです。

保育者の子どもを思う心が、物語の作者の心情ととけあって、あたたかく、子どもの心をゆり動かし、作者と語り手（保育者）と聞き手（子ども）の三者関係がうまくむすばれる時、お話を楽しむ態度、本に親しむ習慣を育てていくように思います。

このような立場から、最近読んで、あるいは、何度もくり返し読んで、是非おすすめしたいと思った本のいくつかを述べてみましょう。

「あおくんときいろちゃん」レオ・レオーニ作　藤田圭雄訳（至光社）

作者のレオ・レオーニが、アトリエに遊びにきたお孫さんを遊ばせながらでき上がったといわれる、小さい子どものための暖かい思いの感じられるユニークな作品です。青と黄色のだんご型の色紙のちぎり紙が、主役のあおくんときいろちゃん。目も鼻も口も、ましてや、手足もないちぎり紙が、効果的に用いられた白の余白部分の中で、思う存分、語り、動き、泣く、個性的な役割を果たしています。

「あおくんが、きいろちゃんに会

えてうれしくてとうとうみどりになりました」

子どもたちはこの部分がすきで、何度もそこを開かせては「ホラネ」という顔をして、にっこりします。

「**島ひきおに**」　山下明生文　梶山俊夫絵（偕成社）

海の中の島にたった一人で住んでいた鬼は、お友だちがほしくて、船や雲をみては遊んでいけと叫びます。でも、誰も鬼に近よるものはありません。ある嵐の夜、その島にたどりついた漁師に「どうしたら友だちになれるか」とたずねます。生きた心地のしない漁師はできそうもない条件を考えて「島をひっぱってくればいい」と教えます。本気にした鬼はありたけの力を出して島をひっぱって漁師たちの村にやってきました。

でも、鬼をこわがった漁師たちは、はかりごとをめぐらして鬼を追い払ってしまいます。鬼は「こっちゃきて遊んでいけ」と叫びながら、遠い南の島には鬼と人間とが仲よく住んでいるといううわさを信じて、どこまでもどこまでも島をひっぱっていき、とうとう波の中に消えていくのです。この話が終わると、必ず何人かの子どもが、「鬼はいきているの?」「今でもまだ島をひっぱっているのよね」といいにきます。ほんとうに今でも海をみると……そんな思いのするお話です。

そのほか、「**八郎**」・「**花さき山**」などども、いろいろな思いを育ててくれる絵本です。いずれも斉藤隆介作、滝平二郎絵で、前者は福音館、後者は岩崎書店です。むくむくと大きくなって何かやりたいと願っていた八郎が山を背負い、あれる海をしずめて、村を災害から救う自己犠牲。自分のことより人のことを思って涙を流して辛抱すれば、花さき山に美しい花が咲くという花さき山。切り絵の特徴が充分にいかされて、文、絵ともにすばらしい作品です。ただ、この種の物語の読みきかせは、感動をもって語るのは大切ですが、それをどうけとめるかは子ども自身のものであり、感じ方の押しつけをしてはならないと思います。

「**貝のうた**」・「**ちょうの夢**」谷村まち子（ヨルダン社）

地球上のどこかでだれかがその隣人に小さな親切をする時、宇宙のどこかで星が生まれるという序章ではじまる「星のかんむり」と共に、なくなった娘さんに捧げる三部作であ

るといわれます。一人ぼっちのみにくい貝の娘が、からだの奥ふかくささった砂つぶをちち色の涙でつつみ、美しい真珠を生み出す栄光の時を迎える話、一匹の小さなベニシジミが、美しいもののいのちが短いことを、さまざまな経験を通して教えられ、星の王女さまから永遠の国の話を聞いて安らかな気持ちになっていく、どちらも楽しく感動的な物語です。

直接の読みきかせは幼児には無理な部分もありますが、大人の立場で読んでも心の洗われる思いのするお話です。絵話や影絵の教材に用いれば、幼児でも感動をもってうけとめることができるでしょう。

最後に「現場での問題をどうとらえたらよいか」「実践研究のヒントを」と相談にくる学生や、新しく現場に出られた方に、紹介している本に、「保育の実践と理論」大場牧夫編著（ひかりのくに）があります。現場での経験をふまえての著者や、保育者としての先輩である方々の実践記録が共感をよぶことと、記録者、問題点の掘りおこし担当者、理論づけと三者による多方面からのとらえ方が具体的なアドバイスとなっていると考えられるからです。

また、子どものいのちを大切に思い、公害問題を自分のこととして考えるために「生と死の妙薬」—自然均衡の破壊者化学薬品—レーチェル・カーソン著・青樹簗一訳（新潮社）も、折をみて読んでおかれるとよい本であると思います。

（西南女学院短期大学）


**幼児の教育** 第七十二巻第十号

**十月号** 定価一二〇円

昭和四十八年九月二十五日印刷
昭和四十八年十月　一日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行者　津守　真

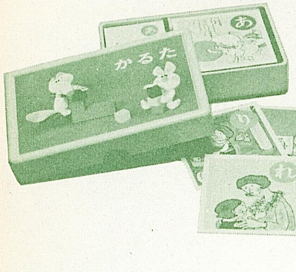
112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一一
印刷所　凸版印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

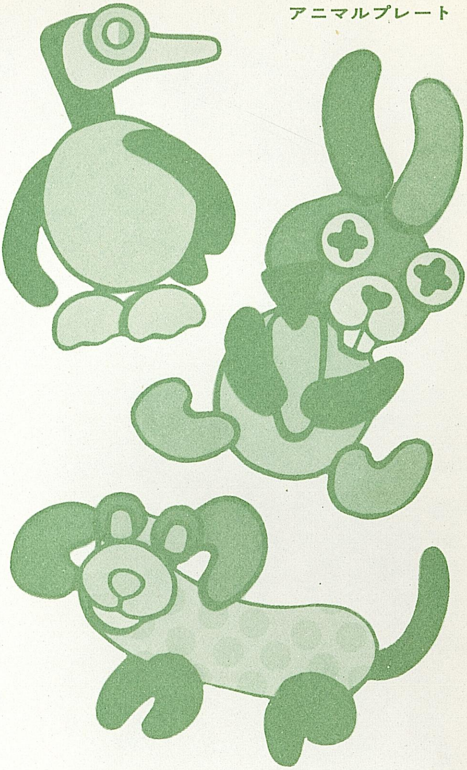
# 遊びのなかで力を育む・・・




キンダーカルタ（A）

キンダーカルタ（B）

アニマルプレート



## キンダーかるたⒶ

現代っ子の生活がテーマです。子どもたちはまど・みちを先生の楽しい文と竹山のぼる先生の明るい絵をとおしていろいろな遊びや生活の知識を楽しみながら、学びとっていくでしょう。

## キンダーかるたⒷ

世界の童話がテーマです。筒井敬介先生の簡潔な文と田名網敬一先生の色彩豊かな絵が、子どもたちを楽しい童話の世界へ引き込んでいくでしょう。（童話の解説入り）

**ⒶⒷとも、プラスチックケース入り　170円**

## アニマルプレート

単純な**プレートの組み合わせで**、いろいろな動物を作る教材です。ちょっとしたプレートの変化で、思いがけない表情や動きが生まれ、知らず知らず、遊びに熱中してしまいます。

目かくしして、**ふくわらい**をしたり、**絵描き歌**の要領で遊ぶことも楽しいでしょう。

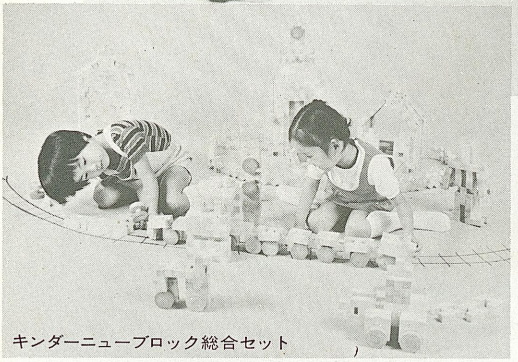
ひとつの単純な遊びからも、どんどん遊びが発展してゆくので、年少児から年長児まで、楽しく遊びながら創造力を養うことができます。

価格の手頃さから、園でのプレゼント用品にも好適でしょう。

**価格　250円**

株式会社 フレーベル館

キンダー“オロ”



キンダーニューブロック総合セット

ぼくらの
ステキなおともだち!!

キンダー
## ニューブロック総合セット
6,000円

- 積む、組む、はめ込むという方法に、動かす機能を加えた新しいタイプの積木です。
- 美しい色あいと、心よい感触のこの遊具は低発泡スチロール樹脂で、伸縮性がなく、ピッタリ組みあわされる精巧さは四季を通じて変わりません。
- 汚れたら洗剤で洗いおとしてください。材質に影響を与えることはありません。
- キンダークロスブロックと併用してご使用になれば、遊びが一層楽しく発展するでしょう。

★材質　低発泡スチロール樹脂

キンダー
## OLO “オロ”
4ケース 1セット 9,000円
（1ケース 2,500円）

- キンダー“オロ”は、レゴと一緒に遊べます。
- 園児の成長に並行して、いつまでも楽しく遊べます。
- 園児の創造力、空想力を無限に広げます。
- きれいな整理箱付です。

★材質　ABS樹脂

株式会社 フレーベル館